

---

# 薔薇と桜と王子さま

春の七菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薔薇と桜と王子さま

### 【Nコード】

N8541T

### 【作者名】

春の七菜

### 【あらすじ】

桜です。一年前のあの日、遅刻しそうになって、学校へ行く途中に初めて近道をしようとしたの。塀に登るための足台として井戸に足をかけたら、あれま、つるつと滑って真っ逆さま！そうして気がついたら、なんとそこは異世界でした。

異世界に落っこちちゃったことだけでも大事なのに、馬に蹴られたり怪我したり問答無用で連れさらわれたり、もう大変！そんな桜のドタバタな日常を皆さんにお送りします！

## 01 ブルル村、そこが私の今の居場所。

「いちご、りんご、オレンジ・・・ううん、やっぱりりんごよね」  
果物がきれたから採ってきてほしい、とマーサに頼まれたのは二時間ほど前のこと。

ジェルニ―国外れにあるブルル村、そこが今の私の居場所。  
一年前のあの日、私は学校へ行く途中にある塀を乗り越えて近道をしようとした。

その時に足台にした井戸の縁に生えていた草に足を滑らせ、そのまま井戸に真つ逆さま！

大けがしちゃうのかな、ううん、それ以上に大変なことになっちゃうのかな、なんて冷静に思っていたっけ。

気がつくと私は、この村でお世話になっているマーサの家で横になり、介抱されていた。

まあ、結局けがとかはなかったんだけどね。

今はマーサとその旦那さんの営む小さな宿屋に住み込みで働かせてもらっている。

二人とも、私の事情（だって服だって顔立ちだってこの村の人とは違った）は詳しく聞かずに、優しく接してくれる。まるで本当の子どもに対するように、時に優しく、時に厳しく。私も、本当のお父さんとお母さんじゃないかと錯覚してしまうときがあるほど。まだ一年しか一緒にいないけれど、私は二人が大好きだ。

最初は異世界ということに驚き、不安定になり、大変だったけれど、最近は少しずつこの世界に順応してきているように思う。それも、もちろん二人のおかげ。

「りんごの木、発見しましたー！」

誰に言うともなく、見せるともなく、敬礼！日本人って意味なく敬礼しちゃうこと多いよね。

宿屋からしばらく歩くと、りんごの木がある。この世界は不思議で冬以外であればいつでも果実をもぐことができる。まあ、少ないとか多いとかの違いはあるんだけど。

「なってるなってる」

あちらにもこちらにも、たくさんのりんご。ついにんまりしちゃう。おつといけない、よだれが出そう。

なんで嬉しいかって？だって、たくさんあれば、たくさんのりんごパイができあがって、お客さんに振る舞っても余るじゃない。マーサは私がりんごパイ好きなの知っているから、余った分ごっそりくれるのよ、いいでしょう？まあ、余りすぎるくらいりんごを拾ってっちゃって「限度つてものがあるでしょ」って怒られちゃったことも何回かあるけど……。だって好きなんだから仕方ないよね。

りんごパイ、ただでさえ好きなのに、マーサのりんごパイって蜂蜜の分量がちょうど良くて、とーってもおいしいのよ！ほっぺたが落ちるくらいに！

りんごパイを思い出してにやけながら、落ちているりんごを痛みがないか確認しながらかごに入れていく。本当は木になっているものを採った方がいいんだよね。けどこの世界のりんごの木って背が高いのよ！栗の木みたいに。仕方ないから最初のうちは木に登ってもいでいたんだけれど、たまたまマーサと一緒に来たときに木に登り始めた私を見て、マーサが口をあんぐり開けて何も言えないでい

たのを見てしまつてからは登るのを止めた。うん、何が言いたいかは分かつたし。女の子が木に登るなんて・・・なんて危ない、とか大体そんなところだろう。まあ、こちらの世界の女の子は木に登らないのかもしれないよね。・・・うん？日本も女の子は木に登らないんじゃないかって？いやいや、ジエンダーフリーの時代だもん、・・・意味が違ふとか言わないで。現に私だつて登れてるんだから、日本だつて登れる人は登れるのよ。まあ、そういうことがあつて、マーサを心配させたくもなかったから、木に登るのは止めた。今は下に落ちたばかりだろうと思われるりんごばかりを拾っているのです。

食欲は何よりやる気につながる。いつもよりも俊敏な動きでぱっぱっぱと次々拾つていつて、大きなかがもうあと一個か二個で満杯になりそう。そんな時だった。

地面がわずかに揺れ、馬の鳴き声とけたたましい蹄の音が聞こえたのは。

## 01 ブルル村、そこが私の今の居場所。（後書き）

初めまして、読んでくださってありがとうございます！

今回文章を書くのが初めてなので、ドキドキ・・・。

誤字脱字を見つけたらご報告くださると助かります。

続きを少しずつあげていくので、どうぞ桜の日常をのぞきにきてください！

春の

## 02 目の前には、蹄。りんごが落ちた。ころころん。

目の前には、蹄。・・・蹄ーーーーー！？

「　　っひ・・・

！」

本当にびっくりしたときには悲鳴は出ないらしい。息を吸い込んで終わり、だった。

かこの中のりんごが飛び出して、目の前に蹄が迫って、私が地に打ち付けられて。

あっという間の出来事だった。

飛ばされて衝撃的すぎてしばらくぼけっとしていたんだけど、ハッと気がついて起き上がろうとする。

う、どこか痛めたみたいで痛い・・・けど、我慢我慢。

とりあえずは今起こったことを確認しないと。いったい何事だ！？何とか起き上がって周りを見渡すと、蹄の持ち主である馬はいなかった。どこかへ走り去ってしまったんだろうか。ああ、これって現代で言うひき逃げか！？異世界でひき逃げって・・・。何となくがつくり来てしまう。

ふと。

視界の端で動くものがある。もしか馬に乗っていた人物か！？そう思い、首を動かして、それをしっかりと視界に入れる。と。

「あ・・・あなた」

わお、可愛い声！それに、その声に見合う可愛い顔と可愛い服。うわあ、可愛いだらけだ。日本に行けばアイドルも夢じゃないよ！それくらい美少女だった。

私と同じ黒髪の、小柄の女の子。守ってあげたくなるような雰囲気  
をびんびん醸し出している。こんな女の子が、さっきの暴れ馬を？  
信じられないけど、状況からそうとしか思えない。

着ている服からすると、きつと良いところのお嬢さんって感じ。だ  
って、マーサが貸してくれているこの服や、村の女の子たちの服と  
比べて、一目で素材や造りが違うことが分かる。

彼女は目を見開いて驚愕していた。・・・あれ、私変なところない  
よね？もしか大きな怪我で血が・・・出ているわけでもない。何だ  
ろう、と思いながらも、声をかけてみた。

「馬・・・から落ちたの、よね？大丈夫？」

「え、あ・・・ええ、大丈夫。心配してくださってありがとう。あ  
の、あなたは・・・」

「私？大丈夫大丈夫、この通り元気だから心配しないで」

につこり笑ってみる。でも実は、かなり痛い。腕が。

でも、ここで痛いとかそういうことを言っちゃうと、ややこしいこ  
とになりそうで・・・異世界人の私は、我慢できることは我慢し  
て、もめ事はできる限り起こさず地味に生きるのが良いと、この一  
年で判断したのよ。

それでも心配そうな女の子に、もう一度につこり笑ってみせる。大  
丈夫よ、と念押しするように。

そうすると納得したのか、たたと私に走り寄ってくる。うわ、落  
下したんじゃないかったの、この子。確かに本人の言ったとおりピン  
ピンしてるわ、なんて感心してしまった。いや、確かに大丈夫って  
言ってたけどさ、馬から落ちたんならどこか打ったんじゃないのか  
な、とか思ってたんだもん。でも、本当に至って無事みたい。まあ、  
怪我がないのなら超したことはないよね。



なあんて思つて油断していたのが悪かった。次の瞬間、がば！と肩をつかまれた！痛い痛い痛いから！けど顔には出さないようにがんばる、けど痛いんだよ！言わないけど！

「な、なに・・・」

「お願いがあるの、あなたに！」

「へ？」

お、お願い？

「私の身代わりになつて！」

身代わり。身代わり？身代わりつて。

事態が飲み込めない私に、焦つたように矢継ぎ早に話し始める女の子。名前をジュリエッタと名乗った。

「わたくし、父上や母上に反対したのだけれど、どうしても変えられなくつて。だから無断で出てきたの。これで少しは私の気持ちに分かつてくださればいいのだけれど。でもきつと、そうはいかないのよね・・・。それでね、きつと脱走したことが今頃気づかれて連れ戻そうと兵が向かつているに違いないのよ。だから、ね、本当に申し訳ないと思うのだけれど・・・でも、こればかりは黒髪のあなたにしか頼めないの！お願い！」

「え、あの・・・」

「ありがとう！」

いやいやいや、まだ返事も何もしてないんですけれど。

私の心の中の突っ込みももちろん届かず、呆然としている私に自分のマントをかけて立ち上がる美少女ジュリエッタ。お礼にこれを、

だつて。

おお、マントのくせにとてもさらさらしている。どんな素材かは分からないけれど、きつと高級なものだ。・・・そうではなくて！

「ジュリエッタ、全く理解ができてな・・・」

「大丈夫、兄上たちに言えば、きつと何とかしてくださるわ！」

「いや、だから」

話を聞け！と言う前に、お願いねー！とそれはもうさわやかに手を振りながら走っていくジュリエッタ。木の陰で馬にまたがる。馬、戻ってきていたのか、お利口さんだなあ。なんてどこかと思う。足が痛んで走ることができない私は、立ち上がることもできず、馬とジュリエッタをその場で呆然と見送った。

「・・・結局、何だったの」

嵐が去った、と思った。とりあえず、ひき逃げではなかったけれど、何者か分からないし。身代わりって言われても何のことか分からないし。黒髪のあなたにしか、って言ってたけど、他の黒髪の人でいいと思う。何で私？・・・何となくやつかいごとに引きずり込まれてしまった気がしないでもない。

いやいやいや、やつかいごとには私は首を突っ込みたくない性分だから、昔から。静かに、穏やかな生活を望む私に、やつかいごとなんて言葉は要らない。頭をぶんぶん振って、さっきの考えを吹き飛ばす。

「・・・ああ、りんぐ、拾うんだった」

実際に馬に轢かれて彼女にまくし立てられたのはそんなに時間が経

つていけないけれど、あまり遅くなつてはマーサが心配する。いや、この怪我を見れば十分心配するだらうけれど。なんて言おうかなあ。正直に、馬に轢かれましたって言ったら卒倒するかもしれない。どうしようかなあ。

転がつていたかごを、落ちていた木の枝で引き寄せる。はあ。かごを抱えてため息。

ため息をつくだけ幸せが逃げる！なんて言うけれど、今ため息をつかずに何をつくんた。

「りんご・・・は、お客さんの分だけにしよう」

こんなことになった今、りんごパイが食べたーいとりんごをたくさん集める気力はもう残っていない。

仕方なく手の届く範囲に転がつていたりんごを四つかごに入れたところで、また蹄の音が聞こえた。

・・・正直、もう勘弁してもらいたいんですけど。

### 03 ぶるぶるする腕。空気を読め！

また蹄。今度は有り難いことに、目の前まで来ず少し離れたところで止まってくれた。

ほつとする。一日に二度も馬に轢かれるなんてことは丁重にお断り申し上げたい。

美少女ジュリエッタのお次は誰だ。

痛みと先程のショックで余裕のない私は、キッと馬上の人物を見上げた。

そこには。

「……誰だおまえ」

「いや、あんたが誰だよ」

おおっと、私ったら！つい口が滑っちゃった！

予想通り相手は形整った眉をきゅっと寄せる。

今度の相手は、金髪の美青年でした。

先程の美少女と同じく、はじめ私を見て目を見開いていたようだけれど、私の一言で不機嫌になったようだ。私だってあんたの一言で不機嫌になったよ。なんてね。

でも、そんなに驚かれるってことは、私やっぱりどこかおかしいのかな。異世界人って分かる、とか？

見ていると、音も立てずに馬から降り、近くに寄ってくる。

さつきは少女だったから特に警戒しなかったけれど、今度は男性だ。そう思い、少し体を固めて緊張する。……う、緊張したらまた痛くなってきた、が、我慢我慢……。

男性の手が伸びる。怖くなって、ぎゅっと目をつぶった。

「・・・おまえ」

「な、何ですか」

先程よりずいぶん近くの距離で聞こえたその声。綺麗なテノールボイスだ。思ったよりも透き通るその声に、顔を上げるとそこには、途中で手を止め、険しい顔をした美青年が。

「ジュリエッタはどこへ行った。知っているのだろう」

ちよつと怖い。綺麗な顔立ちの人って、ただでさえ怖く見えるのに、怖い顔したらさらに恐怖感募っちゃうじゃない、と思っていたら。がし！とまた肩をつかまれた。本日二回目。あーもうだから痛いんだってば！

「あの・・・」

「どこへ行ったのかと聞いている。これはジュリエッタのものだろう。おまえが知らぬはずはない」

そう言つて私にかけられているマントをつかむ。

どうすればいいんだろう。彼女は、私が身代わり、と言っていた。でも彼女は誰に対して身代わりと見せかけたかったのか。・・・この人に、言つてしまつていいのだろうか。

『父上や母上に反対したのだけれど、どうしても変えられなくて、だから無断で出てきたの』彼女の言葉を思い出す。・・・人に、ではなくて、その『変えられな』かったことに対しての、身代わり、なのかな。

「あ・・・あなたはジュリエッタとどういう関係が？」

「・・・おまえに何の関係がある」

「じゅ、ジュリエッタは私に、逃げる理由になったことに対しての身代わりをお願いして立ち去りました。私は了承していないけれど、だから、完全に無関係というわけではないような・・・気が」

するんです、けど。青年の視線が鋭くて、つい言葉は尻すぼみになってしまったが、でも、言いたいことは分かるよね？ね？

そう問いかけるように、青年の顔を見ると、ため息をつかれたいや、なんであんながつくんだ。私だつてずっと我慢してるんだぞ。

「俺は、ジュリエッタの異母兄、ジェニールだ。ジュリエッタが婚約に頷かず、逃亡を図ったために連れ戻しに来た。おまえを身代わりに、と言ったのは、おそらく同じ黒髪のおまえを自分の身代わりとして婚約させろ、ということだろう。馬鹿馬鹿しいが」  
「・・・・・・・・」

異母兄、とか、婚約、とか、なんか聞き慣れない言葉があったけれど。内容から考えるに、やっぱり良いところのお嬢さんっていうのはあながち間違っていなかったようだ。というか、そんな大変なことをお願いしていったのか、あのお嬢さんは！

「驚かないんだな」

「は？何を？」

私の言葉に変な顔をする。何を驚けというんだろう。まあ、確かに、婚約なんて言葉が出てきたことに対してはちよつと次元が違っわ、って思ったけど。でも、服や話し方から容易にそういう言葉が似合う（似合うというのもちよつと変だけど）身分の人と想像できるもの。  
それより。

「私は了承してませんよ」

「・・・当たり前だ。妹だって、本気ではなかったのだろうが・・・まあ、少しでも足止めできれば、とか思っていたんじゃないか」

それなら良かった。ほつとする。事情も何も知らず、了承もしていないのに、そんな大変な話を進められたらたまったもんじゃない。

「・・・馬に乗って、あちらへ。行き先は分かりません」  
「そうか」

痛くない左腕を伸ばして、ジュリエッタの向かった先を指差す。  
言葉も態度もつつけんどんで無愛想だけれど、この青年は嘘をついていないと思ったから。だからきつと、言っても大丈夫だと思った。  
・・・あくまでも勘だけど。

ふと下を向いて、ああ、と気がついてジュリエッタがかけてくれたマントを差し出す。これは私には必要ない。

「彼女が貸してくれたものです。でも、私には必要ないから・・・ジュリエッタにお返ししてください」

そう言うと、ひょいと青年は片眉をあげた。器用だなあ。私はできないわ。

「売ればそれなりにはなるぞ」

「必要ありません」

「ほっ？」

どうでもいいけど、早く受け取ってほしい。左手がぴくぴくしてきた。この男もそれに気がついていいるだろうに。

・・・急いで追いかけていたのではなかったのか。ここでこんな悠長に話などしていいのか。

正直、穏やかな生活を望む私はやっかいことになんて巻き込まれたくないので、早く受け取ってもらってこの場を今すぐに去りたい。もしくはこの青年に去って欲しい。

「・・・行かないんですか」

「部下が向かっている」

「え」

いつの間に。

「気がつかなかったのか。おまえの情報を聞いてすぐに指示を」

全く気がつきませんでしたとも。あなたの部下は忍者ですか。まあ、私はマントをはぐので一生懸命でしたからね。

・・・。。

・・・だから。

「受け取ってください」

「俺には必要ない」

「だから、あなたにはではなく彼女に返してと」

「あいつもいらないんじゃないのか」

「そんなの本人に聞かなきゃ・・・」

「おまえ、その怪我はどうした」

「・・・え？」

話についていけない。おーい、今そんな話してた？



まあ、彼女はだませても、この青年には、怪我をしていないなんて言葉は通用しないように思う。だけど、できれば話を長引かせたくないんですよ、すぐにマントを受け取っていなくなつて欲しいんですよ、私はね。それくらい空気読みなさいよ！

「……………とにかく、受け取ってください」

「俺の質問に答えろ」

「腕が限界なんですよ！」

「そんなことはいい。俺の質問に答えろと言っている」

「そんなことはつて……ええ、そうですとも転んで怪我しましたとも。でも、これはあなたには関係のない……つた！」

痛みが引かない右腕を捕まれた。見た目は軽く触つたように見えただけ、これが激痛だった。何するんだ！

「かなり痛んでいるようだがな」

「だから、派手に転んだつて……！」

ああ、話が進まないというのはこんなに腹が立つことなのか！

まあ、確かに怪我をしたのはあなたの妹さんが関係していますけれどね、きつとそれも分かっているような口ぶりですけど、それならそれで、私は被害者なわけで、痛いところさらに痛くされてさらにはそんな怖い顔でにらまれないかなきゃいけない立場なんかではないはずよ、絶対！

にらみつけようと顔をあげる。そこには、予想外に真剣な顔をした青年がいた。文句を言いかけた口も、自然と閉じる。

「服の裾や真中に蹄の跡がついているな。馬に踏まれた以外、どう言い訳する」

「・・・・・・・・」

改めてワンピースを見ると、ああ、確かに。あちらこちらに蹄跡がついていました。  
今度こそ、私の口からため息がこぼれた。

#### 04 聞いちゃいねえ。会話が成り立ちません。

「ジュリエッタが馬を暴走させて激突、といったところか。申し訳なかったな。妹に代わり謝ろう」

聞かなくとも分かってるんじゃないか。というかそんな不遜な態度で言われても謝っているようには全く聞こえません。と、言いたかったけれど、言わなかった。これ以上話をしてはいけない、関わってはいけないと、どこかで警笛が鳴っている。

「大丈夫です。命も無事ですし、怪我だって安静にしておけば治りますから」

だから、どうぞ私のことなど捨て置いて妹さんのところに向かわれてください。

どうかどうか今すぐに。

そんな思いを込めて青年を見る。いや、見るだけだと変に誤解されても困ると途中で考え直し、声に出してお願いしてみた。が。

「そうか」

と言ったきり、思案顔になり黙ってしまった。

分かったのなら、どうか立ち去ってほしい。それと・・・できれば人の顔をじろじろ見ながら考え事するのはやめてほしい。なんとなく。中身はあれだけど、外見はまあまあ格好良いんだから、ずっと見られるのはちょっと心臓に悪い。あくまでちょっとだけ、ね。

「おまえのその髪は」

「え、髪？」

「生来のものか」

「せいら・・・ああ、生まれつきってこと？そうですけど・・・」

「その言葉、真だな」

「う、嘘なんかじゃ・・・」

怒っているのか真顔なのか知らないけど、目がギラギラしていて怖いんですけど。

でもって何で髪のことなんか聞くの？私の髪、なんか変？

そういえば、ジュリエッタも黒髪のあなたにしか、って言っていたけれど、他の人でも良いのに私に頼むってことは、このあたりじゃ珍しいのかなあ？

わけが分からず、青年を見つめていると、ふと手を引かれた。いやいやいやふとじゃなかった。思い切りだった。それは、痛みのない手だったけれども。

「いつ・・・痛い痛いいいいた、いたたたたた！痛いから！！！」

手を引かれて立ち上がらせられる。そうして、踏み出した足がこれがまた痛かった。さらには、反動でちよつと揺れた右腕がめっちゃ痛かった。

ああ、体のあちらこちらが痛くて涙が出そう。物心がついてから涙を流したことがなくて、日本では乾物なんて言われていた私です。

・ああ、でもやっぱり涙は出なかったわ。

起こすにしてももうちよつと手加減ってものがあるでしょうよ、しかもレディに対して！そう思ってキツとにらみつける。これでも背の高い私は威圧感あるって言われてたんだ、日本で。少しは怯め！

「おまえ、名は」

うわあ、効いちゃいねえ。私より背が高かった相手は全然気にしていないようだ。

「名は」

「・・・・・・・・」

「口が開かなくなっただか？なら剣で・・・」

「い、言えはいいでしょ！さ、桜よ！」

なんて物騒な男なんだ！

「・・・・・・・・さくらよ？」

「さ・く・ら、です、桜っ！いい加減手を離してください！」

「桜、か。珍しい名だな。どこの生まれだ」

聞いちゃいねえ。がつくり。

「答える」

「・・・・・・・・」

強く言えば何でも答えると思ったら大間違いよ！と思ったけれど。ああ、これがきつと権力を持っているだろう人の言葉なんだと思った。若いけれど、きつとこの青年は、貴族とか騎士とか、人の上に立って指揮する、そういう立場にいる人だ。だってこの青年の言葉には力がある。そうして、つい話してしまいそうになる。けど。

マーサたちにだって詳しく話をしていない。それをこの青年に？

「異世界から来た」なんて言っつて、マーサたちから離れなきゃいけないことになっちゃったら？

適当に違ふところの名前を言つたつて、調べれば違ふつてことがすぐに分かる。ううん、それ以前にブルル村以外の町の名前なんて知らない。だからつて下手にブルル村のことを持ち出せば、迷惑になるような気がする。

・・・話さないという選択肢は、きつとない。この青年がどういう人かは分からないけど、見た目と態度が偉そうな人が、こんなここにでもいるような一人の村民にしつこく聞いてくるのは、それはきつと何かあるはずなんだ。私がどこにでもいるような一人の村民には見えないということだ。・・・私自身はそうは思わないけれど。でも、そうだとすれば、話さなかったところで今後何かしらの問題が発生してくるはずだ、きつと。それは困る。特に、マーサや旦那さんに迷惑がかかることだけは、避けなくちゃいけない。

相手は私をにらみつけるように見たまま、私の言葉を待っている。一年、か。隠れるようにひっそりとした生活、それでも本当の家族ができたような、毎日が幸せな夢を見ているようなそんな日々だった。

異世界人の私が、こうやって大変な思いもせず、のほほんと過ごせてきたのも、きつと奇跡だったのだろう。

「潮時、か」

手を離されないうまま、私は空を仰いだ。ああ、良い天気。井戸に落ちたあの日も、こんな天気だった。

青年に向き直る。

覚悟を、決めた。

## 05 考え事はお口を閉じて。周囲確認も忘れずに。

言い訳はできない、と思う。きつと嘘をついたところで、このどこか鋭い青年はごまかされないだろうから。

だから本当のことを話した。一年前のあの日のこと、学校に行く途中で井戸に落ちて、気がついたらこの世界にいたこと、自分は異世界から来たこと、この一年は近くの村の親切な人に養ってもらっていたこと……。

話し終わって、安堵か、諦めか、どちらか分からないけれど、ため息が出た。

・・・本当は、誰かにこの話を聞いてもらいたかったのかもしれない、と思う。

ずっと聞いてほしくて、でも誰にも話せなくて。

話したら迷惑になるかもしれない。話したら変な目で見られて、もうこの穏やかな場所にはいられないかもしれない。この幸せな場所を失いたくない。そう思ったら怖くて話せなかった。

おそろおそろ青年の顔を窺う。

どう思っただろうか。変なことを言う女だと思っただろうか。それとも、異世界だなんて気持ち悪いと思っただろうか。そんな考えがよぎったが、反して青年の表情は全く変わっていなかった。

「……………あの」

「……………ああ、」

なにやらまた思案しているよう。何を考えているんだろう。表情からは何も読めなくて、落ち着かない。

私はこれからどうすればいいんだろう。・・・どうなるんだろう。

見逃してもらえないかなあ。異世界人ということでは話を聞かれたりとか、そういうのだけなら良いんだけど。とりあえず、生活が一変するとかのやつかいごとに巻き込むのだけは止めて欲しい。あの数時間前までの、穏やかな生活に戻りたいという希望は、最後まで捨てません・・・が、なんだかやつかいごと、思いつきり巻き込まれそうな気がするんだよね、さつきからひしひしと。・・・気のせいだよな！うん！

「それは、本当の話か？」

「こんな話即興できるほど私はメルヘンな思考の持ち主じゃないわ」

メルヘン？と首をかしげられたが、私もうまく説明できずに黙り込む。青年は、そんな私の様子に気分を害した様子もなく、口を開いた。

「おまえ、異世界より来たのであれば知らないだろうが、この国では、黒は高貴な色の一つとされている。そして、黒髪は王族よりしか生まれない」

「・・・？どういう・・・」

「そういう理なんだよ、この国において。もちろん黒髪だからといって王位継承権に大きく関わるとかそういう話ではないが、とにかく王族以外に黒髪はいない。存在するはずがないんだ。王族でも、百年に一人、持って生まれるかどうか、それ程に珍しい。これは遺伝することもない。神の気まぐれと、そう言われている。そして、現在において我が妹ジュリエッタが唯一、この国の黒髪の持ち主だ」

「・・・」

「平民より生まれることはない。前例は一件もない。・・・だから、おまえが異世界から来たという話も、個人的にはとても信じられない話だが・・・ただ、その理からすれば、異世界人ということで黒



髪の説明はつく。全く信じられないわけじゃあないな」

「はあ、それは」

良かった、と言えいいのか。不思議な話。そんなことがあるのね、  
としか言えない。私の中の常識を遥かに超える事象に、へえ、そう  
なんだーと事実として取り入れることしかできない。この黒髪、そ  
んなに珍しいものなんだな。きっと、国の外れらしくかなりの田舎  
であるこの村だからこそ、私の髪の色をみんな気にすることもなく、  
私も静かに過ごしていられたのだろう。

そうか、だからあんなにジュリエッタもこのジェニールという青年  
も驚いていたのか。

………ん？ジュリエッタ？

黒髪が生まれるのは王族だけで、ジュリエッタが黒髪を持っている、  
っていうことは。

「お、おおおおおつ王族！？ジュリエッタつて王族！？」

つまりジュリエッタの兄つて言つてたこの青年も、王族つてこと！？

驚いて青年を振り仰ぐと、なんだか呆れた目でこちらを見つめてい  
る。はいはい、たつた今気がつきましたとも、どうせ頭の回転が遅  
いですよーだ、悪いか！

こほん。ええと、王族つて、王族つてあれだよ、王様一家のこと  
だよ、かなりというかこの国で一番偉いんだよ、ね？

とすると……良いところのお嬢さんお坊ちゃんと思つていた私の  
勘も、当たらずしも遠からず、むしろ近いほうなんじゃない、とい  
うか、あれっ？日本は王族なんていなかったからあまり実感はない

けど、こうやって身分が全く違う私が青年と同じく立つたまま話すのって、もしかしていけないこと、だったりするんじゃない!? さっきなんて私の方が座ってこの青年立たせたまま話してたし! だからせめてと礼儀知らずの私を引っ張って立たせたのか、そうなのか!? どうしよう、私、今からでもひれ伏した方が良い!? もう遅い、不敬罪じゃーとか言われて処罰されるかも! そ、そそそっさいえ、ばさっき口答えなんぞしちゃった気がするぞ、しかもあんた誰だ、って! わああああ! いや、でも馬上から一言誰だはないよね! 親しき仲にも礼儀ありだけど親しくなければもつと礼儀を重視しろ! いやいやでも王族だったら名乗らなくて分かって当たり前なのか? でもでも仕方ないじゃない! 王族の顔なんて見たことないに決まってるでしょ! 異世界から来たんだから! 名前だって知るはずないし! そうかさっきこの青年が名乗った後変な顔したのは『知らないのか』っていう呆れからか! 納得! でもだって、そんな王族の話なんてこの一年でほとんどしたことないのに知るか! ああでもとりあえず素直に名乗っておけば・・・そうだよ、私のモットーは地味に生きましよう　なのに! 何でこんな時に限って破ってしまったんだー!

さあーっと血の気が引いていく音がある。きっと今の私の顔青い通り越して真っ黒だよ、それこそ髪のように真っ黒だよ! 黒髪といえ、あれ、とすると黒髪を持つてる私、もしかして王族以外なのに黒髪だなんて許せーんとかってしょっぱかれちゃうの!?

ああどう考えたって悪い方向へ! ジーザス! そんな内面の動揺が十分顔に出ていたんだと思う。声をかけられた。

「全部口に出ているぞ。面白いが、そろそろ落ち着いたらどうだ」  
顔じゃなくて口に出ていたか! しまった! ではなくて、こここれ

が落ち着いてなんかいられますかってのよ！  
私がこんなにてんぱっているのに、青年は動じず、さらにはにやりと笑う。

「喜べ、処罰はしない」

「・・・ほ、本当？」

ほっ、とした、もつかの間でした。

「ただし」

「・・・ん？」

「俺の妻となるならな」

「・・・は！？」

ああ、やっぱりやつかいごとに巻き込まれてしまいましたよ。私の勘って当たるんです。

この際占い師に転職しちゃおうかな。

## 06 学校みたいにな、避難経路図揭示しませんか？

あの後。私の意思（拒否）をことごとくさらさらつと気持ちの良くくらしいに無視なさった青年ジェニールは、あつという間に私を彼のおうちらしいお城へと連れ去ってしまいました。その人さらいは今、私を荷物のように抱えてお城の廊下を歩いています。もちろん、メイドさんや騎士さんたちの熱い視線を集めてね。わあ、こんなに注目されたの、生まれて初めて！・・・全う然嬉しくないけど。とにかく、まあ視線が熱いかどうかはともかくとして、さっきからその視線が痛くて痛くて。もともと地味に過ぎて人の注目を浴びるのが苦手な私にとっては、恥ずかしいっただけじゃない。おかげで顔も上げられません。仕方がないので人さらいの背中に顔を埋めています。ものすーごく、嫌だけど。ああ、むしろ暴れて逃げちゃおうかなーとも思ってたけれど、体が痛くてそれかなわんない。ああ、なんてかわいそうな私。さあ、私の運命やいかに！？

「人さらいなどと。人聞きの悪いことを言うな」

「ひっ」

「気をつける。さっきから思っていることがダダ漏れだ」

「・・・・・・・・」

気をつけましょう、けど、本当のことでしょうよ。

最初は敬語で話そうとがんばっていた私だったけれど、無礼極まりないこの青年と話していると次第にどうしても敬語でなくなってしまう。どうしてだ。日本では礼儀正しいと定評があったのに。まあ、ということで仕方がないのでもう努力はやめた。相手も気にしないようだから、私も気にしないことにした。あれ、私こんな子だったっけ。

はあ。それにしても、ずいぶんなやつかいことに巻き込まれた気がします。相変わらずこの青年は何を考えているのか分からないし。

「逃げようなんて考えるなよ」

「逃げ出したい理由を作ってるのはどこのどいつよ」

「王族となることが不満か？まさかな」

「その自分中心で世界が回ると思ってるのが腹立つわ」

「・・・王族に対しずいぶんな口の利き方だな」

「あなたもね。人との関わり方、一から勉強したら」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ああ言えばこう言う。ああ腹立つわ。この青年とは何があっても相容れる気がしない。

「おまえがどう思おうが、話は進める」

「私はその話に了承してないしする気もない」

「拒否権があると思うか」

「日本ではね、結婚は両者の合意に基づくの。一人の意思だけじゃできないのよ」

「異世界の話か？残念だが、ここでは効力を持たないな」

「知ってるわよ。でもそういう世界で育ってきた私に求婚するのなら当然考慮して欲しいわね。強硬手段をとるのなら何が何でも逃げ出してやる」

「逃げ出すのは最善の策とは言えないが」

「だから説明しなさいってば」

「おまえには関係ない」

「思いつきがあるでしょうよ」

ないとは言わせない。ここまできて関係ないとはなんだ、関係ないとは。本当にないのなら、私でなくて良いのなら早くマーサの家に帰せ。

・・・そうだ、マーサ！

「ねえ、ちょっと」

「うるさい、もう黙れ」

「うるさい、じゃない！本当に困るんだってば！私、家に帰らないと！」

きつと今頃心配してる。

宿屋を出たのがお昼ご飯を食べた後で、今は太陽がだいぶ傾いている。心配して外に探しに出ているかもしれない。

帰りたい。帰れない。

ただでさえここは王城なんだ。さっきは逃げ出す、なんて言ったけれど、今この怪我をした状態で逃げ切れるなんて思えない。とりあえずは逃げずに様子見かな。

それに、逃げたら逃げたで問題が起こっても困るし。青年、得策じゃないって言い切ったしね、逃げ出したら何かあると思う。そういえば連れてこられる前、妻になるなら処罰はしないって言った気がする。言ったよね？ということは拒否したら処罰されちゃうってこと？得策じゃないってそういう

「後で使いをやるよ。その時に金でも渡しておくか？」

「・・・な」

何を考えているんだ。それまで考えていたことが一瞬で真っ白になる。

どうしてそういう話になる。お金とかそういう問題じゃないでしょ。これだから金持ちは！お金さえあれば全て解決できると思っているんだから！というか、そんなことをされたら、まるで私がお金で買われたみたいじゃないか！王族が人身売買着手か！？それよりも私をなんだと思っっているんだ！！

カツと頭に来て、痛みのない左膝で青年の腹を蹴る。そりゃあもう、思いつ切り、遠慮なく全身全霊込めてね！

「・・・っ」

これが少しは効いたようで（鳩尾だったみたいです）、歩みが止まり、私を抱える腕がゆるんだ。

やっちゃった。

そう思った次の瞬間には、私は青年から飛び降りていた。尻餅をつきそうになるのをどうにかこらえ、走り出す。

相も変わらず、右腕は痛いし右足も痛い。けど、そんなのかまっている場合じゃない。

「っ　　待て！」

待てと言われて待つほどお馬鹿じゃありませんから！いーだ！

さっきまで、体が痛くて逃げられないなんて思っていたけれど、やってみればできるもんだ。なーんだ、はじめからこうすれば良かったんだ。むしろあの森で振り切れば良かったのかも。

・・・ん？あれ、そういえばさっき妻になるの拒否したら処罰かどうかって考えてたんだっけ。それに逃げてても得策じゃないとか言わ

れて様子見しようと思いい直したばかりだった気がする。しかも、あの瞬間は忘れていたけれど、私が蹴った人物って、王族の一人、・・・らしいんだけど。この場合ってどうなるの、やっぱ何か罰せられたり・・・。

「・・・・・」

まあいつか。どうにかなるはず！異世界に落ちても何とかやってきたんだから！

そう開き直った。いや、この場合開き直るしかないよね！

ほらほら、よく目には目を、歯には歯をって言うじゃない！蹴られるくらい無神経なことを言ったんだから、仕様がないうね！これくらい当然の報いよ。少しは思い知ればいいわ！・・・と自分を正当化させてみるけど。本当は、蹴るなんてことしちゃいけないのは分かっているんだよ。だけど、やっちゃったもんは仕方がないもん！

そう頭の中もフル回転させながら全速力で走る。自慢じゃないけど、これでも中学校の時にはリレーの選手に選ばれてたくらいには足が速かったのです。高校に入って、背がぐんぐん伸びちゃって、体の変化についていけなくて少し遅くなっちゃったけれど、それでも十分早いほうだと思う。

廊下を走って、突き当たりを曲がって、また曲がって。どこをどう行けば出口に出られるのかは分からないけれど、とにかくがむしゃらに走った。抱えられていたとき、階段はまだ一階分しか登っていなかったはずだから、ここは二階だろうと見当をつける。さあ、まずは階段を探して一階に降りなきゃ！

「おい！」



うわ、結構青年も速いじゃない。何度も言うが、中学校の時には陸上部員とサッカー部員の精鋭をのぞいて、男子にも負けなかったのに。私ったらこの一年でそんなに遅くなっちゃったかしら。ああ、それとも日本人男子と青年の足の長さの差かな？

なーんて考えるくらいには余裕があるみたい、私。でも後ろは振り向かない。だって、その分口スになっちゃうでしょ？

・・・というか、さっきから走れど走れど階段が見つかりません。目印代わりにとチェックしていた通路に掛けられている絵が違ったら、同じところは走っていないと思うんだけど・・・おおっと、まずい、行き止まりだ！

角を曲がったら、窓が一つ。とりあえず窓に駆け寄り、下をのぞくひえ、思っていたよりちょっと高い。

「残念だったな」

声をかけられ後ろを振り返ると、青年も角を曲がったところだった。ここまでのどり着くのあと二十メートル、くらい、かな。逃げられないことを知っているからか、青年の歩みがゆっくりになる。まるで逃れられない獲物のおびえる姿を楽しむ獣みたいだ。くそう。

「鬼ごっこは終わりか？」

くそう、このいやみ男！

「・・・すぐに終わったらゲームは面白くないでしょ」

「早く終わらせた方が時間の有効活用ができと思わないか？」

「知らないわよそんなの。・・・私は帰るの。何か言いたいことでも？」

「『逃げるのは得策とは言えない』。さっき言ったばかりだが」

「だからと言って、ここに残ってあなたと結婚することに私はなんの魅力も感じないわ」

「それは残念。だが逃げられては困る。それに・・・」

につこり。人形のように綺麗な笑顔。この顔だけを見た女の子はきつと、目がハートになるんだろう。中身を知ってしまった私は、そんな思いを抱くことは一生ないだろうけれど。

「腹を蹴っておいて謝りもしないじゃじゃ馬娘に礼儀を教えてやらないとな」

「自業自得でしょうが。全身全霊で遠慮申し上げますよ」

体の向きは青年に向けて緊張感を保ったまま、先程見つけた、丸く綺麗にカットされた木々にこっそりと視線を移す。

二階の高さ、前には青年。

・・・天秤にかけることなんてしなくても、答えは最初から決まっている。

「追いかけてこは終わりよ」

素早く振り向いて窓枠に足をかける。青年が目を見開いたのがちらりと見えた。おや、そんな顔もできるんじゃない。

「残念なのは、あなたの方ね！」

全部あんたの思い通りにさせてたまるかってんですよ！へっへーんだ！

捨て台詞だってバツチリ決めて、迷わず窓から飛び降りた。

07 たかがかくれんぼ？いやいや命がけですから！

そうして、今に至る。

今は夕暮れ、太陽がヒルの何倍もに大きく大きくなって地平線に沈もうとしています。

え、私？何してるのかって？

もちろん、悪の手から逃れようと逃亡真っ最中ですよ！

どこに向かって？そりゃもちろん、ブルル村へ！向かっていた、はず、なんだけれども・・・。

さあ問題です。私は今どこにいるでしょう？

「・・・・・・・・」

ああ残念！時間切れ！答えは・・・・・・・・。

私も分かりません！えへっ。

あの後、窓から飛び降りた私は、狙ったとおりの木々の上に着地できた。そう、そこまでは良かったのよ。落ちた衝撃は木々が吸収してくれたから、怪我の痛みも悪化することはなかったし。でもそこからが問題だった。私が飛び降りたのは、お城の城壁の内側。つまり、城壁をどうにかして突破しなきゃいけないのです。仕方がないので、城壁に沿って抜け穴探しをしていたんだけど、途中で今度はいきなりメイドさんらしき集団や見回りの衛兵さんたちに見つかりそうになっちゃって。隠れつつ移動していたら・・・奥へと入り込んでいたみたいです。

どこをどう歩いたかも覚えていないし・・・ああ、とりあえず誰にも見つからないようにしなくちゃ。服も汚れているし、それ以前に着ているのがこんな村人丸出しの服じゃあね。どうやっても使用人には見えないわ。あやしいやつ！とかつてバツサリされても仕方ない状況ね。

「・・・行つた、かな？」

柱の陰から向こう側をそつと窺う。さつきも危なく見回り中の衛兵さんに見つかりそうになつて、この柱に隠れてやり過ごしたの。その衛兵さんの姿はもう見えなくつて、助かったと胸をなで下ろす。あそこで青年を蹴つて逃げることを決めたのは私なだけど、やっぱりなかなか王城は逃げることを許してはくれないみたいだ。

まあ、それだからこそ逃げ出しがいがあるってもんよね！・・・と前向きに考えることにする。

柱から顔をちよこつと出して、誰もいないことを確認してからまたそろそろと移動する。もうどちらに行けばいいか分からなくて、勘に頼るばかり。・・・いやいや、私の勘つて的中率が高いんだつた。今回だつて、きっとそうに違いない！そう自分を励ましながらたり着いた先は。

・・・回廊、というのだろうか。海外に行つたことがないから、これがそうなのかどうかは分からないけれど。目の前には大きな中庭とそれを取り囲むような廊下。

中庭はよく手入れされていた。背の低い木々は綺麗にカッティングされているし、庭のあちらこちらで白、黄色、ピンク、様々な色や種類の花が咲き誇っている。ふいに水の音がして視線を動かして探してみると、回廊の四隅に小さな噴水が。わあ、なんだか物語に出てくるお城みたい。・・・まあ、本当にお城なんだけど。

ああ、庭の真ん中に進み出て、お花畑の中心に行ってみたい。  
素敵な雰囲気の回廊。花の咲く中庭。そこに女の子が一人。なんか  
これって。

「・・・お姫さまみたいじゃない？」

ちよつと笑う。安易すぎるか。こんな簡素なワンピースのお姫さま  
なんて聞いたこともない。靴だってもらい物だし。想像するのはち  
よつと難しいかなあ。でもね、私だっで曲がりなりにも女の子だも  
ん、少しくらい夢くらい見たって良いよね。

・・・なーんて、油断したのがいけなかった。

「お姉ちゃん、だあれ？」

びくびくびくっ！なんということ！足音も話し声もしなかったし、  
さつき見たときは誰もいなかったのに！そう思いながらそろそろと  
振り返ると、・・・小さな小さな金髪の天使が私を見上げていたの  
です。

「・・・え・・・つと・・・」

「お客さん？お城に遊びに来たの？」

首をかしげて私を見つめる、碧の瞳。ああ、顔に対してなんて大き

な目！こぼれ落ちそう！

改めてよく見れば、この小さい天使が身につけているのは私の服とは次元が違う、上質なもの。きっとこの子も王族の一人とか、そういう感じだろう。間違っではないと思う。ああ私って、今日は『王族』から逃れられない運命なの？今まで一人も会ったことがなかったのに、今日一日で（おそらく）三人だよ！人生最高記録更新中だよ！

ううん。どうしよう。子どもとはいえ、（おそらく）王族だし。（おそらく）王族だけど子どもだし。

まこうと思えば簡単にまけるとは思っけど、せっかくだから出口を教えてもらえないかな。

でももし本当に王族であれば、いくら幼くともそこら辺はしっかり教育されているかもしれない。

そこまで考えたとき、カツ、カツと足音が回廊に響き渡った。ままままずい、誰か来たのかも！

急いであたりを見回すが、回廊の柱の陰などはすぐに見つかっちゃうだろうし、隠れるなら中庭のどこかしかない。いや、回廊だからむしろ中庭は隠れる様が丸見え！？い、いやいや、音をよく聞いてみれば、回廊に向かっていている足音、みたいな気がする。とにかく行くな！今しかない！えゝゝゝい！と勢いよく踏み出そうとしたが、はたと気がつく。

この子はどうしよう。

残していけば、遊びだと思って元気よく追いかけてくるかもしれない。そうじゃなくとも、ここに向かっていている人に私の場所を教えてくださいましたら。

・・・よし。

「ねえ、お姉ちゃんと一緒にかくれんぼしよう!」

「かくれんぼ?」

「そう、お姉ちゃんね、鬼さんから逃げている途中なの、一緒に隠れよう!」

不思議そうな顔から一点、少年の顔が輝いた。ああ、笑顔が可愛い! まぶしい! やっぱり天使に見えるよ!

「うん!」

そうして私たちは手を取り合って(というより私が抱きかかえるようにして)中庭へ飛び出した。

背の低い木々のあたりにしゃがみこんで隠れる。茂った緑の葉が隠れた上に覆い被さって、良い具合に体を隠してくれている、ような気がする。

誰の足音なんだろう。メイドさん? 衛兵さん? それとも、青年関係? 足音がだいぶ近くなった。足音の持ち主はとうとう回廊へとたどり着いたらしい。どうぞどうぞ、見つかりませんように。

「・・・・・・・・?」

足音が止まった。

え、どうして? あ、あれだよ、きつと、中庭の花々に感心しているんだよね。私たちが見つかったわけじゃあ、ないよね?



それからしばらくしても、足音は聞こえてこない。だんだんと手に汗がにじんできて、つい少年と繋いでいる手をぎゅっと握った。すると、きゅっと握り返してくれた、小さな手。（大丈夫だよ）少年がにっこりと勇気づけるように笑っていた。

この少年はきつと、本当にかくれんぼをしていると思っているに違いない。見つかつちやったら罰せられるかもしれない、なんて切羽詰まった私の事情、知るはずもないだろう。それでもずいぶんと勇気づけられて、私もちよつと笑い返した。

しばらくして、誰かが駆けてくる足音が聞こえた。それも、一人じやなく複数人の足音。な、ななな何事！？

縮こめた体を、気持ちさらに折り曲げてみる。ああ、体が小さかったら隣の少年のようにもつと容易に隠れることができたのに。どうしてこんなによきによき伸びてしまったんだ！・・・ここで嘆いても仕方がないことだけど。

息をひそめて耳をそばだてる。隣の少年は、何も話していないのに心得たもので、身動きせず、静かに隠れている。なんて物わかりのよい子なんだろう、と思ったその時、ぼそぼそと会話が聞こえてきた。

「城門・・・より・・・」「・・・こつちに・・・目撃したと・・・

」「使用人から・・・との苦情が・・・」「・・・足止めも限界に・・・」

会話の内容からするに、集団は誰かを捜しているらしい。誰のことかって、まあ、今考えられるのは私くらいだけど。でも、足止めって？

「王子に恨みはないが・・・」

突然、声が耳に明瞭に届いた。・・・王子？

「聞かれてしまった以上は仕方がない。幼い子どもを手にかけるのは少々気が引けるが」

・・・聞かれてしまった？幼い子どもって？  
手に、かける  
って？

「見つけ次第連れ出し  
消せ」

・・・何？どういうこと？

この人たちが探しているのは、私じゃない。え、ちょっと待ってよ。幼い、と、王子、という言葉から連想するのは、話をしている人たちが探しているのは、  
この子、だ。この子は王子で、話の内容からすれば、きつと聞いてはいけないこと、聞かれちゃまずいことを聞いちゃったんだろう。そして今、命が狙われているんだ。もし仮に違っていたとしても、この話を聞いたことで、この子と私は狙われる理由ができてしまった。

隣を見る。手を握ったままの少年は、膝に顔を埋めて座っていた。今の話が聞こえたかどうかは分からないし、聞こえたとしてもどうい内容かは分かっていないかもしれない。ただ、見えない表情が気にかかる。

ふと、私の視線を感じたのか顔を上げたそこには、さっきと変わらない笑顔。・・・ああ。さっきとは違う理由で汗が噴き出た。



## 08 熊に背中見せちゃいけないって、本当ですか？

「お探ししましたよ」

穏やかな話し方。柔和な人、そんな印象。

それでも、先程の言葉を発していたのは、確かにこの声だ。振り向かなきゃ。そう思っても、体が動かない。

「バミアス？」

子ども独特の高い声が聞こえた。聞こえると同時に、握っていた手が離れていく。

はつと隣を見ると、少年が後ろを振り返り、立ち上がるところだった。

「お勉強の時間に姿が見えないと、皆ですっとお探ししていたんですよ」

「・・・ごめんなさい」

「お城の探検もよろしいですが、王子たる者、国のためにも多くを勉強していただかないと」

「・・・うん、これからは気をつけるよ」

ほらね、やっぱりこの少年は王子だった。そうじゃないかと思ったんだ。

それにしても、王子と臣下のこのやりとりに、どこにも違和感なんて感じない。すぐ襲われちゃうんじゃないかとひやひやしていたのに。

さっきのはもしかして違う人の声だったのかな。それとも、聞き間違ひ？私の思い込みか勘違い？

少し気が緩み、私も王子にならって振り向くと、そこにいたのは中年の男。  
目が合う。

「・・・・・・・・」

さっきのがもし私の勘違いなのだとしたら、この状況はあまりよろしくない気がする。ううん、勘違いだったらそれもそれでとても大変なことなだけども。

例えばさっきのが私の勘違いで、この人がなんの企みも考えていなかったの（ただのつていうのも変だけれど）臣下だとしたら、王子と一緒にいる見知らぬ人物を見過ごすことなどあり得ない。

「何者」

「え・・・・・・・・と・・・・・・・・」

そうですね、何者だ、本当そうだと思います。ああ困った。ここで正直に「ジェニールとかいう馬鹿男に無理矢理連れてこられてどうにかこうにか抜け出して現在逃亡中の村人です」なんて言っていた信じてもらえるわけがないし。

「・・・・・・・・まあ、その身なりからして、食材でも運んできた村人であろう。道に迷うでもしたか」

「え、と・・・・・・・・はい、あの」

なんと答えたら良いものか分からず、口ごもる。中年男性にじろじろと見られながら、どうすることもできず、私も困ったまま見つめ返す。ふと、中年男性の表情が変わった。

「・・・これはなんとも、まあ」

「・・・？」

「いや・・・どこぞへ連れて行つてからとも思つたが、これは都合が良いこと。天は私に味方しているらしい」

突然、機嫌が良くなつた男は、笑いながら小さな剣を腰から抜く。  
え、ちょ、ちよつと待って！ーいや、表情と行動のつながりが全くもって見えないんですけど！

剣こつちに向けないで！小さな剣でも怖いから！

「バミアス！？止めて！」

「えっ、いや、だめだつて出てきちゃ！」

「ねえバミアス、どうしたの、お姉ちゃんは悪い人じゃないよ、僕と遊んでくれてるんだよ！」

さすがになんだか危ないぞつていうことが理解できたらしい王子は、私の前に立つて必死に私を弁護し始める。ちよつと格好良いし嬉しいけど、でも危ないから！ね！

視線はバミアスという男にはり付けたまま、王子をどうにか横に避けようとするが、絶対に動こうとしない。それどころか、私の腰にがつしりと抱きついてきた。

「だめだつてば、離れて！」

「いやだ！お姉ちゃん、悪い人じゃないもん！」

「ピンポン全くその通り！全然悪くないけど、この状況じゃあなたも危ないでしょう！」

「大丈夫、ぼ、僕が守つてあげるから！」

さすが王子さまと感心しかけるけど、私のことなんか気にしないでとにかく下がつて！むしろ私だけが危ないならここをダッシュす

れば良いだけの話だから！狙われていたわけじゃないのなら、わざわざ危ないところに自分から飛び込んで来なくていいのよ！しかしその思いは小さなナイトには伝わらない。

しばらくそんなやりとりを続けていると、ふいにバミアスと呼ばれた男が剣を下ろした。・・・あれ、もしかして助かった？なんて思っただけだ。

「大丈夫ですよ。ご安心ください、ホルンさま」

男は中腰になり、王子を安心させるように、優しく語りかける。

でも、・・・私は気づいてしまった。この人は優しくなんか、ない。だって、顔は笑っているけれど、声も目も、笑ってなんか、いない。

「すぐに同じ場所へと連れて行って差し上げますから」

男の持つ空気ががらりと変わった。やっぱり、私の勘違いなんかじゃなかったんだ。

王子に向けていた目を、こちらに向ける。怖い。心臓はこれ以上ないほどに早く打ってるし、汗が次々噴き出してくるし、体が緊張して固まりそうだけれど、怯むわけにはいかない。思わず王子の体をぎゅっと抱きしめる。

「どうせ女は我々の話を聞いていたのだろう」

しらばっくれたって、きつと通じない。

「・・・聞、いてたわよ。あんたたちが、企んでること、詳しくは

知らないけど、・・・何をしようとしてるのはこの耳でちゃん  
と聞いたんだから」

「それならば女、王子一人で旅立つのは心細く可哀想とは思わない  
か？王子はえらくお前を気に入っているご様子、供してやれ」

「お断りします！この子にだってそんなことさせるわけないでしょ  
！それにそんなこと言っで、どうせ私に罪をなすりつける気なん  
でしょ」

話は断片的にしか聞こえてこなかったけれど、それをつなぎ合わせ  
て、今、ようやく分かった。さっきの『都合が良い』という言葉の  
意味も、考えればすぐに出てくる。この男や仲間は、この王子をど  
こかへ連れ出してどうにかする予定だったのだろうけど、私も一緒  
に始末することで、誰にも見つからずに連れ出すなんて危ないこと  
しなくて良くなったんだ。なぜって、『見知らぬあやしい女が王子  
を手にかけた、そのため自分が女を始末したのだ』などと大声で嘆  
いてまわれば、男は疑われることがないからね。・・・分かったけ  
れど、そんな思い通りにさせるもんですか！

「・・・頭は悪くないようだな」

「事情はよく分からないけれど、何かまずいことを聞かれたんだっ  
たら、こんな子どもに聞かれるようなところで話をしたあんなた  
ちが悪いのよ！」

「小声で話していたはずだったが、そこまで聞こえていたか。なら  
ばどちらにしろ生かしてはおけぬ」

まずい。とつさに腰に抱きついてた王子を無理矢理引きはがして  
背に隠し、じりじりと後退する。

ああ、熊と出会ってしまったときはこんな感じなのかもしれない。  
遠足で山登りするときに、熊には背中を見せちゃいけないよって言  
われた気がする。あれ、違う？ずっと昔のことだから確かじゃない。



日本にもし帰れたら調べてみよう。

目を離さず、背を向けず、隙を作らず。王子はその間も必死で私の前に出ようとするけれど、お願いだから大人しく隠れていて！と私も必死で背中にはり付けさせる。

私一人だったら、どうにか逃げ切れるかもしれない。だけど、この子はどうする。抱えて走って、逃げ切れるのか。

あの青年との時とは比べものにならない。絶体絶命、大ピンチだ。

いつの間にか辺りは暗くなっていた。この薄暗い中でも、男の持つ剣は月の光を反射し、ぎらりと光る。結構小さめの剣だけど、刺されたらやっぱり、大変なことになっちゃうのかな。・・・なっちゃうよね。

こうなったら、腹をくくるしかない。

「王子、逃げて」

「に、逃げるよ！」

「逃げるの！それで、誰か人を連れてきてちょうだい、できるだけ早く」

それが一番、二人で生き残れる可能性が高いから、と。それでも王子は迷っているようだった。

迷うのも、分かるけれど。早く逃げて、早く早く、できるだけ遠くへ。

睨み合いのこの状態がいつまで続くか分からない。もしかしたら次の瞬間に終わりが来るかもしれない。だから、その前に。

「私を助けたいと思うなら、お願いだから言うことを聞いて。・・・ね？」

優しく、懇願するように言うと、王子はぎゅうつと私の背中に顔を埋めた。

「・・・また、遊んでくれる？」

その言葉に、なんだか笑いたくなかった。可愛いなあ、のんきにそう思った。

「約束する」

「約束だよ」

「それは困りますね」

・・・もう！せっかく良い雰囲気だったのに、入ってこないでよ。

「私だって今の状況は困ってるんだけど」

「困らせるほどの時間を与えてしまった私が不親切でしたね。」

・・・それでは、そろそろ終わりにしましょうか。私も暇ではない」

ほらね。終わりが来る。探り合いのにらめっこも、・・・中庭の散歩も。気がつけばすぐ後ろは回廊。コツ、と王子が回廊の床に到着した音が聞こえて。それが合図となった。

「走って！」

「させるか！」

私の言葉と腕に押され走り出した王子。男は私より先に王子を優先させようと判断し、追いかける体勢に入って一歩踏み出す。私から視線が逸れた。

男のマントをつかむ。

振り返ったその男の、顔。ああなんて醜い。人は罪を犯すとき、こんな顔をしているのか。

「余計な事を」

頭上で銀に光る、これは。

・・・やられる

。

今日はなんて厄日なんだろう。思い浮かぶのは、日本の友だち、マ―サ、旦那さん、村の人たち、そして、・・・ジュリエッタに馬鹿男。王子は、どこまで行けたかな。後ろを振り向かず懸命に走って。どうかこの男の仲間に、見つかりませんように。この短時間で次々と思い浮かぶ、これが走馬燈？

銀色から瞼の中に瞳を隠し、再び開いた私の目に飛び込んできたのは 月の光を受けて白く輝く金色。そして、ざぶ、という嫌な音。

「この馬鹿女」

・  
・  
・懐かしいな、そう思った。

09 だって名前呼ばれたらつい振り向いちゃうよね。(前書き)

ひどくはないですが、何力所か流血表現があります。苦手な方には読まれるのをおすすめしませんが、もし読まれる場合はお気をつけてご覧くださいませ。

## 09 だって名前呼ばれたらつい振り向いちゃうよね。

実際には、懐かしいと思うほど離れていたわけではないけれど、せいぜい一時間か二時間くらいだろう。それでもそう感じるくらい、私にはとてもとても長かった。

変なの。最初はこの青年のせいでずっと緊張していたのに、今はなぜか緊張でなく安心を覚える。どこかで、もう大丈夫だと、ほっとしている自分がいる。まだ味方と決まったわけじゃないのに。

「おっ・・・王子殿下!？」

目の前に広い背中があつて、私のところから男の顔を見ることはできない。それでも、すごく狼狽しているらしいことは伝わってくる。

「も、申し訳ございません!すぐに手当てを・・・!」

「良い。それよりもバミラス、何をしていた?」

手当てって?

ばた、と小さな音がする。音の先を探っていくと、視線は自然と下へ。

暗くてよく見えないけれど、中庭のよく刈り取られた草の上に、黒い点々が。ああ、また落ちた。何だろう。それに、・・・さっきの、嫌な音は。

「そ、それは・・・」

「なんだ、この俺にもすぐには言えぬ事か?何か言えぬ事情でも?」

「と、とんでもない!その娘、あ、怪しいと思ひませぬか。先程、あの、ホルン王子と一緒にいるところを目撃しまして。引きはがし

て王子の身の安全は確保しましたが、何を企んでいるのか知れぬこの娘については災いを及ぼす前に即刻処分せねばと……」

その言葉に、点々に釘付けだった視線をぐっと上げる。

嘘をつけ！災いをもたらそうと思ってるのはあんたでしょうが！よくそう嘘をぺらぺらと！よし分かった、そんなに望むなら願い通りそんな舌は今すぐ引っこ抜いてやる！そう、目の前の背中から勇み出ようとし、……青年の左腕に止められた。なんだ、男を庇うなんて実はやっぱり味方じゃなかったのか！？敵か！？よしじゃああんたのも……なんてカーツとして文句を言おうとした次の瞬間、その腕に目が釘付けとなった。赤かった。ひえ、血、これって血だよ、血がどばどば出てるよ！やっぱりさっきの、ぼたっという音ってこれが草の上に落ちる音だったんだよ！

青年は男の方を見ていて、こちらからは顔が見えない。でもきつと平然として表情を全く変えないでいるんだろう。今こうやって話をしている最中だって、痛みをこちらに少しも感じさせない。だけど絶対に痛いはずだ。だって見ている私がこんなに痛い！

腕に刺激がいかないように注意しながら、背中の服を握って揺さぶるけれど、何も反応してくれない。ねえ、大丈夫なの、これ。

「そうか、ホルンを」

「臣下として、当然のつとめでございますから。……つきましては、王子殿下のお目汚しとなりますし、お手を煩わせたくもございませんので、この場は是非私に……」

「俺はてつきり、自らの企みが露見し、口封じのためにホルンと娘を始末するのかと、先程の話や行いより見当をつけて見ていたのだが……俺の思い違いだったようだな？」

……あれ、今見ていたって言った？

「・・・お、王子殿下・・・？」

「知っていたか？この中庭の名を。・・・レスティアルロビア、古代の言葉で『妖精の懐』という意味らしい。逢い引きや内緒話をしても、懐に入れて守るように、妖精がそれを外界から隠してくれるからだそうだ」

「・・・何の話を、」

「しかし妖精の機嫌を損ねるような真似をすると、逆にどんなに小声で話していても、はるか遠くにいる者にまで声が届くらしい」

小声が遠くまで・・・？そういえば、ホルン王子と隠れているとき、男たちの会話が途中からやけにはつきりと聞こえ始めたんだった。それは、じゃあ、男たちが妖精の機嫌を損ねたから聞こえるようになったっていうこと？・・・当たり前のように妖精って言ってるけど、妖精って実際にいるの？・・・不思議だわ・・・。

青年の背中からひよいと顔を出して男を見ると、さあーっと音が聞こえてきそうな勢いで男の顔が白くなっていく。おおお、これが血の気が引くってことか。

「ま、まさか・・・」

「この中庭で事を行う際には気をつけた方がいい。奥で人通りも少なく、格好の場所と判断したのだろうが・・・妖精はお前の行いに腹を立てたらしいな。回廊より遠くにいた俺の耳にも、娘やホルン、そしてお前の会話が届いてきたぞ。・・・言い逃れは、できないと思うがな」

「・・・っ！」

白を通り越していよいよ透け始める！？かと思われた男が、剣を握りしめる、のを見た。あ、と思ったときには大きく振りかぶってい



た。

そして私は、青年の左腕にはじき飛ばされ尻餅をつく。痛い！何するんだ！いやそんなことより、男は！？青年は！？どうなったの！？急いで顔を上げると、……って、あれ？

「結果など見えているだろうに。諦めの悪い」

すらりと長い剣を持った青年を挟んだ向こう側に、男が仰向けで倒れていた。

え、これってもしかして……やつちゃったの！？焦って青年を振り仰ぐと、青年が首を振った。

「剣で受け止めて蹴飛ばしただけだ。頭でも打ったんじゃないか」

つまらん、弱すぎだ、根性のない、とか呆れたような声音でぶつぶつ呟いている。ああ、やつつけちゃったんじゃないかって良かった。男がしようとしていた行為を青年がしたのでなくて良かった。何が良かったのかは、自分でもよく分からないけれど、ほっと息をつく。そうしているうちに、複数人の足音が聞こえ始めた。すぐに騎士の集団が現れ、青年が指示をするとあっという間に伸びている男を連れて去っていき……。

そしてまた、出会ったときのように、また二人きりとなった。

「全く……馬に踏まれ、二階から飛び降り、次は命を狙われて？

忙しいやつだな」

「・・・・・・・・」

私の前に膝をつく青年。私だって好きでそうなってるわけじゃないから。そうは思っても全くもってその通りなので、心の中だけで突っ込んでみた。・・・そんなことより。

「ねえ、どうしてこんなことしたの？」

「・・・こんなこと、は何を指してるんだ？」

「小さな王子を守って、っていうのは分かるけど、私を守るのに怪我をする必要なんかないと思う」

青年の左手首を掴み、傷を見る。傷はそこまで大きくないけれど、深いのか刺された場所が悪かったのか、血がまだ完全には止まっていない。

「腕で止めるのが一番早かったから、というのは理由にはならないか？」

「違う！そうじゃなくて・・・」

そういうことじゃなくて。本当に伝わっていないのか、あえて気づかぬふりをしているのか。・・・後者の可能性の方が大きい気がする。ああ、いらいらしてくる。

「ただの、村人の私なんて、ここでどうにかなったところであなたにもこの国に支障がないはずでしょ」

「ただの村人ではないし、俺に支障がない、というのも間違いだな」

青年の返しはもう無視した。何を言ったところで、飄々ととぼけ続けるに違いない。

掴んでいた手を離し、ワンピースの裾のできるだけ汚れていない箇所を選んでびりびりと破く。ごめん、マーサ。せつかくの服だけね、許してね。

青年の視線を感じる。でも私は青年に話しかけず、黙々と作業を進めていった。

破いた裾は、幅がところどころ違って不格好だけれど、包帯に見えなくはない、・・・と思う。

その包帯の端を傷口にあてがい、力を入れられる左の手のひらでぐつと押す。こんなひどい怪我の止血なんてしたことないけど、注射した後によく『ガーゼの上からしばらく押して止血しましょうね』とかって言われるから、その大きい版だと思えばこんな感じじゃないかな。

「・・・どこから聞いてたの？どうしてここが？」

「さっきも言っただろ。聞いてなかったのか？回廊の近くを歩いていたらおまえたち三人のやりとりが聞こえたんだよ」

「・・・」

「聞こえたのは・・・ホルンとおまえが離れる離れないのやりとりをしているあたりか。その後は、確証をつかむまでと思い、柱の陰で見ていた。・・・すぐに助けず悪かったな」

まさかと思っただけど、やっぱり見ていたらしい。でも怒りは湧いてこなかった。

「・・・別に、それは良いよ」

この通り、助かったんだし。それより私、聞きたいことが。

「それより、遠くまで聞こえたっていうのは本当？妖精の話って、

それも本当のこと？この世界に妖精って、本当にいるの？」

「本当、本当、本当かと質問が多いな。・・・ああ、全てその通りだ。この王城には、他にも妖精が住んでいる箇所がいくつもある。人間の目には見えないがな」

この国じゃおとぎ話のように誰もが知る有名な話なんだが、そんなことも知らないんだな。そう言う青年。仕方ないじゃない。この世界に来たの、一年前なんだってば。

「・・・どうした？」

「・・・不思議すぎて・・・今頭がついていってない、かも」

「このような世界は嫌か？」

「・・・ううん、嫌じゃ・・・ない、と思う。信じられないことばかりだけど。だけど色々な世界があつて、この世界にはこの世界のルールや常識があるわけで、この世界にお邪魔している身としては、受け入れなきゃいけないんだと思う」

私にとっては不思議でも、この世界の人にとっては知らない私の方が不思議なんだろうし。こんな世界は嫌だと突っぱねて殻に籠もってしまうのは違うと思うんだよね。嫌だとか思う前に、少しでも世界に順応しようとしなくちゃ前に進めない。生きることだってできない。知っている人や甘えられる人なんていないんだから。郷には入れば郷に従えって言うしね。そう思いながらこの一年を過ごして、普通の村人として生活できるくらいにはこの世界のこと、覚えたの。

「ふうん」

そっけない返事。何よ、おかしいことなんて言っていないと思うけど。そう思いながら青年を見上げると、どこことなく機嫌が良さそうに笑っていた。どうしてだろう。金色の髪が風に揺れる、その様子を見

て、あ！と思い出す。

「それより、あの小さな王子さまは？見ていたってことは、逃げたことを知っているんでしょ。そうだ、あの男には仲間がいるのよ！襲われないでちゃんと逃げ切れた？」

「今頃部下が護衛をしているはずだ。望むなら、後で会わせてやるよ」

「・・・そっか、良かった」

あの状況で、怖かっただろうに私を守ろうとしてくれた小さな男の子。無事で本当に良かったと、胸をなで下ろした。

もう良いかな、と傷口にあてがっていた部分の続きを使って腕をぐるぐる巻きにする。

「・・・こんなこと初めてだし、正しいやり方なんて知らないの。だから早くお医者さんに診てもらって」

王族専属のお医者さんが、きつといるはずだ。

包帯だって、きれいなところを選んだとはいっても清潔なわけじゃない。包帯からばい菌が入って余計ひどくなりました、なんてなったら全く笑えないし。血が止まったような気はするけど、気のせいかもしれないし。

よし、やることはやった。いつまでも座ったままではいられない、

そろそろ立ち上がらなきゃと思ったけれど、踏ん張ることができず、浮かせた腰をまた地につけてしまった。困った、一人で起き上がる事ができない。・・・ああ、そういえば私も怪我してたんだった。今更のように思い出す。ぼんやりしていると、青年は私の左腕を引っ張って起こしてくれた。ちよつと痛いけど。会ったばかりのあの時も同じように起こしてくれたんだったわ。今日のことなのに、随分昔のことのような気がする。

「・・・ありがとう」

「・・・いや」

起こしてくれたことにちゃんとお礼を言ったのに、頭上で、はあ、とため息が聞こえた。出会って初めてお礼を言ったのにそれか。

「おまえは、なんなんだ。どうしたいんだ」

「いや、意味分らないから。なんなんだって何」

「俺が嫌なのか、嫌でないのか、どちらだ。先程は俺から逃げたくせに、今は留まって当然のように俺の手当てをしている」

俺の怪我などほうつて再び逃走しなくて良いのか。チャンス逃したんじゃないか？これから逃げようとしても無駄だぞ。そう呟かれてちよつとカチンとくる。そんなこと。私を守って怪我したのにほうつておけますか。というより、目の前に怪我した人がいたら手当てしなきゃと思うのは当たり前でしょうが。なんでこんな簡単なことと分らないの。

「それに、明らかに自分の方が重傷だろう」

え？そんなそんな、私のはただ転んだときにひねっただけかもしれないし。血がだらだら出てたあなたのほうがどちらかというと重傷

でしょうよ。

「・・・とにかく、お医者さんに早く」

「診てもらうさ。だがおまえが先だ」

「え？」

「おまえの痛み方、尋常ではない。骨に異常があるかもしれない」

・・・え、えええ、骨に異常って。これまで骨折もなんざも経験した事がないから全く分からないけれど。骨に異常がある様子をリアルに思い浮かべて、ひえ、と肩をすくめる。骨折って、痛いんだよね。だって、骨にひびが入ったり折れたりすることですよ、ひいい、痛いすぎでしょ！じゃあ今感じてるこの痛みってそういう痛みなの！？うわ考えるとさらに痛みが増してくる。よしよしよし、うん、考えないようにしよう。それがいい。

「それに、妻を優先させるのが当然だろう」

「いやいやいや誰が誰の妻だよ」

「おまえが俺の妻だろ」

「だろじゃない！誰がいつ決めたのよ」

「俺がさっき決めた」

「どれだけ自己中心なのよ！」

ああ、疲れる！突っ込みが！息も荒くなってきた。そんな私の様子を見てくくく、と笑う青年。全然おかしくないから！

「まあ、待て。分かった。ふざけるのはよそう」

ふざけてたのか？怪我人に向かって？いつから？まさか最初から？・・・叩いて良いですか。拳をつくってぐぐぐつと握りしめる。

「分かった分かった。順序を追って説明しよう。そう怒るな。それに・・・何も永遠に俺の妻になれ、とは言っていないだろう」

「・・・・・・・・・・は？」

意味が分かりませんけど。永遠じゃないってことは、え、どういうこと。あれか。離婚するってことか？

「・・・ん？とすると・・・じゃあようするに離婚前提の期限付き結婚ってこと？ひ、ひどすぎる！」

「・・・・・・・・い、おい！聞いているのか？」

「もちろん聞いていませんとも乙女の心をずたずたに切り裂いてそんなに面白いですかこのやろー！」

「・・・・・・・・何を怒っているのか知らないが、話を聞けよ」

誰の言葉でこんなにこーんなに嘆いているかと思っっているんだ！人生で初めて妻になれて言われたそれがふざけているのか離婚前提だなんて、そんなのってない！夢見る女の子になんてことをしてくれるんだ、これからいつかどこかの誰かにされるかもしれない記念すべきプロポーズに恐怖と疑心を抱いちゃったらどうしてくれるんだ！私とその相手に謝れ！むっと青年の顔を見るがやっぱり効き目はない。

こうなったら絶対話なんか聞いてやるもんかとそっぽを向く。顔だっけ見てやらない、口だっけ聞かない！と子どものように意地になりかけたとき。

桜、と名前を呼ばれた。

「・・・・・・・・・・」



習慣で、そして名前を呼ばれたことに驚いて、ぱっと青年の顔を振り返ってしまふ。

「・・・・・・・・何」

ああ悔しい。そんな私の心情にかまわず青年は、にっこり笑って言葉が続けた。

「取引をしようじゃないか」

## 10 18才のぴっちぴちの女の子ですけど、何か？

取引？首をかしげて青年を見る。青年はというと、周りを見渡した後、私を担いで中庭の中央へ歩き始めた。この運ばれ方も二回目となれば慣れちゃったわ、なーんて思うもんですか。レディをどんな抱き方してくれるんだとやっぱバタバタしていると、草の上に静かに下ろされた。・・・まあ、一応怪我のこと考慮してくれているようだけれど、だからってさっきの抱き方は許容しませんからね。考え事をしているうちに、青年は私の前に腰を下ろしていた。二人で向かい合って座る。・・・なんか変な感じなんですけど。

「ここはレスティアルロピア。内緒話にはこの王城で一番適した場所だ」

「・・・・・・？」

「あの男のように、この話で妖精が機嫌を損ねないでくれると良いんだが」

よろしく頼むな、と誰もいないはずの周囲に声を掛ける。えーと、もしかして、妖精に話しかけたの？妖精がこちら辺にいるの？妖精にそうやって普通に声を掛けて通じるものなの？っていうか妖精は実在するの？ああ分らない。私の中で、どうしても妖精という存在がはつきりしない。考え始めるとはまって抜けられなくなりそうだったから、そういうものかと思考に区切りをつけた。きっといるっていうんだからいるのかもしれないよね、うん。よし終わり。ええと、確か、妖精が話を周りから隠してくれるんだったよね。それで・・・妖精に頼ってまで隠さなきゃならない取引って？

「おまえは自分の世界に帰りたいか」

いきなりなんの話かと思えば。話の脈絡という言葉を知っていますかと問いたかったけれど、見ると存外真面目な顔だったので、とりあえず素直に答えた。

「・・・とりあえず、今は帰りたいと思ってる。この世界も、嫌いじゃないけど」

帰りたいのは、本当。正直に言えば日本に特に愛着があるわけじゃないけど。でもこうやって實際離れてみると、ちよっと寂しいなと思う。たまに、ふと日本を思い出して帰りたいと思うこともある。

「それなら、その世界に帰れるよう、俺の力の及ぶ範囲で協力しよう」

「え？」

「この城には昔からの多くの書物がある。もしかしたら、以前にも異世界から迷い込んだ住人がいるかもしれない。そのことを記した書物を見つけ、その人物の軌跡を辿ることができれば、帰る方法を見つけることも不可能ではないと思う。・・・まあ、あくまで可能性の話だが」

「・・・」

「加え、こちらにおまえが迷い込んで最初に辿り着いた土地の調査もしよう。何かおまえの故国とつながるものが見つかるかもしれない」

「それは・・・」

願ってもない。有り難い話、だけれど。何が目的かまだ分からない。

「その代わり、おまえが俺の妻となれ。千歩譲って婚約者でも良い」  
「・・・いや、だからね、『その代わり』って『代わり』になってないから。よし、順々に話そう。ね。話を整理するの手伝ってあげ

る。気づいてないかもしれないけど、全くつながってないから。しかも百歩じゃなくて千歩かい、微妙に多いわ！」

「落ち着きがないな。最後まで聞け」

「誰のせいよ！」

「俺は表向き、この国の第一王子、となっている」

無視ですか。

「このまま何事も起きなければ、次の王位の座は俺が即くのだろう。そのためかこしばらく見合い話が多くて困っていてな。貴族の娘に他国の王女まで・・・王妃という、この国の最高位とまではいかなくとも同等の権力を持つ座を欲しているんだろう。それを狙っているのが当人か、それともその背後にいる者か、それは分かんが・・・だが、あいにく俺は婚姻などするつもりはない」

「・・・それは、どうして？」

「王妃の座に即いたからと、自分の存在意味を勘違いして国政へ口出しをされれば迷惑だ。それに、王妃の近親者がさらなる権力欲しさにご機嫌伺いに来られるのも面倒だ」

「まあ・・・それはそうかもしれないけど」

権力を持っている人たちはその人たちなりの事情があるんだろう。私には縁がない話だけど。

「それに、今のところ女にも興味がない」

「・・・ええと、お話の腰を折って申し訳ございませんが、じゃあ男し・・・」

「それ以上口にすれば首が飛ぶと思え」

「・・・」

ひええ！怖いよ！怖いから！だってだって自分で言っただじゃん！女

に興味がないって！

「言っておくが、そういう趣味を持ち合わせているわけじゃない。  
・女あのねっとりした話し方や振る舞い方、けばけばしい化粧  
とその臭い……。昔から女は好かん。皆たぬきに見えて仕方がな  
い」

「……はあ」

ええと、ですね。個人がどう思おうが自由ではあるんですけど、女が好かないとかたぬきとか、私に面と向かって堂々と言わないでくれないかな。言いたいことは分かるけど。実際女社会の一部はどろどろしちやったりしていることもたまーにあるけど。でもねえ、もしや今更知らなかったとは言わせませんよ、確認しておきますが散々な言われよしの“女”っていうカテゴリーの中に私も一応入っているんですよ。そこは言葉を濁すとか、ちょっとは配慮しようよ。

「その点おまえは、性別は女だろうが、見た目も中身も少年のようだ。化粧の臭いもしない。女に接している気がしない」

「は、……見た目も中身も、って……」

ちよっとちよっと、女に接している気がしないってかなり失礼じゃないですか。あんた何様。……王子さまか。こんな失礼な奴が王子さまなんて私は認めたくないけど世間ではそうなんだろう。まあ、それは置いておいて。

私は日本でも化粧水と乳液だけで済ませてたし、この世界に来ても化粧なんてしてないから化粧の臭いがしないのは当然なんだよね。それでも髪は肩より長いし背だつて160cm以上あるし、まあ東洋人が童顔なのは仕方ないけど、それを考慮したってほぼ大人の女にしか見えないと思うんですけど？少年にはどこからどう見たって見えな……

「胸もないしなあ」

「・・・成敗

！！！」

振り上げた手は簡単にキャッチされる。こここのやろう！

なっ、ななななんてことを言うんだ、この馬鹿男！やっぱりこいつは王子なんかじゃない、馬鹿男で十分だ！失礼極まりすぎる！

ああもうこの馬鹿男、どうしてくれようか。ぶるぶるぶる。キャッチされた手が怒りで震える。ぶるぶるぶるぶる！

普通は王子さまなんかに手を掴まれちゃって『きゃー恥ずかしい！』で赤くなるんだろうけど全くもって違う意味で掴まれた手が赤くなる。手から腕、首、顔、足・・・体中が熱くなる。沸騰してしまいそう。今なら顔で卵焼きが焼けるぞ、握ればゆで卵ができるかも、玉子を三個持つてこーい！怒りでのぼせて茹で蛸状態、頭もぐるぐるまわって正常に働きません！

「おいおい、俺は第一王子だぞ、少しは周りを気にしろよ」

「あんたが言葉を気にしろ！む、むむっ・・・むむむ胸がないとは、レディに向かって、な、なん、たる・・・！」

手を掴まれながらも思わず勢いでガバツと立ち上がる。あ、手伝わしてもらわなくても一人で立ち上げられるじゃない、なんて思う余裕もなく。

困りました怒りが大きすぎてスムーズに言葉が出てきません！た、確かにね、巨乳なんかじゃありませんよ、ええそうですとも巨乳じゃありませんとも！それでもそれでも！

自分もゆっくりと立ち上がりながら、どこか呆れたような目で見てくる青年。何だその目は！

「ほらな、こうやってすぐ感情をあらわにして怒る。だから少年の

ようだ」と

「さっきから少年、少年ってねえ・・・」

まだ手は掴まれている。右手は怪我で使えない。右足は痛いし、左足を使いたくとも右足で体を支えるなんて無理。手も足も使えないならば。

「こ・・・っ」

「こ？」

「これでも私は18才だし胸は日本の平均サイズだ  
！！」

ドゴッ・・・と少しこもった音。

馬鹿男の胸に、それはもう容赦なく渾身の頭突きをくらわしました。相手の方が背が高く、頭に突けなかったのが唯一残念だわ。

使えるものは使う。手足がダメでも頭がある。

大人の女をなめるなよ！

11 こんな至近距離なのに甘さの欠片もありません。

予想外の攻撃によろけた馬鹿男。踏ん張ろうとはしていたみたいだけれど。そこに、勢いが止まらなくて痛みのない左足一本に体重をかけたけれど持ちこたえられずバランスを崩した私がどーんと体当たりし・・・押し倒しました。男なら女の子一人の体重くらい支えろよ、そんな文句も出かかったけれど、私の怪我に響かないように底いながら尻餅をついてくれたようなのでそれに免じて不問としました。

通常ならば「きゃっ、王子さまを押し倒しちゃったわ!」「これはこれは大胆なお姫さまだ」なんてシチュエーションなのかもしれないけれど、そんな甘い空気はもちろん流れません。

A diagram consisting of a 6x4 grid of dots. Each of the four corners of the grid is marked with a small L-shaped bracket, indicating the extent of the array.

至近距離ですつとにらみ合いが続いています。

頭突きを胸に食らったせいかしばらく出続けていた咳も、ようやく止まったようです。その後もまだ胸をなで続ける青年。今も。もういい加減痛みは引いたと思いますがね。嫌みでしつこい男は嫌われますよ。たとえば王子さまだろうとね。

「 「 「 「 「  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
「 「 「 「 「  
謝れ



「あんたがまず謝れ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

自分で女だレディだときゃんぎゃんわめく割に口も手癖も頭癖も悪い、とかなんとかぶつぶつ呟いている。おーい、聞こえてますよ。こんなに近いんだから聞こえない方がおかしいでしょうが。・・・ん？ということは聞こえるようにわざと言っててるのか？うわ、性格悪い。もう一発くれてやろうか。そう思ったとき。

「・・・・・・・・まあ、18の女に・・・見えないこともない」

ぼそつと聞こえた。

・・・こいつ。けんかを売ってるのか、パツと顔を上げてにらみつけると、そこには苦虫をかみつぶしたような顔があった。・・・フオローなのか何なのか知らないが、もしかしたらこいつなりに歩み寄ろうとしているのかもしれない。全くもってそんな風には聞こえないけど。何で俺が、って思っているのは丸見えだけど。王子だかなんだか知らないけど、もうちょっと人との接し方勉強し直したら？もう、腹立つったら。

でも・・・どうしようかなあ。まあ、確かににらみ合いが始まってかなりの時間が経っていて、さすがの私も、非が当然あちらにあるとはいえこれ以上にらみ合いを続けるのは時間の無駄遣いも甚だしいと思っていたんだよね。よし、話を先に進めるためにもここは私が大人になって、言い方とこの嫌そうな顔にはまあ目を瞑ってあげよう。偉いなあ、私。

「まあ、許してあげなくもないわ」

「・・・・・・・・随分不遜な態度だな」

「あんたもな」

「・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・」

ああ言っちゃった！大人になるって決めたばかりなのに！

はあ。私のため息に青年が落としたため息が重なる。・・・お互いに、思ったことが口と顔に素直に出てしまうらしい。似たもの同士なのかもしれないあとどこかで思った。もう細かいことは気にしないで、いい加減話を続けるのを優先しないと、本当に話が進まない。

「・・・・・・・・それで？続きは？」

問いかけると青年の眉がぴくりと動き、何か言いたそうに私を見た。あれ、私の問いかけ方が気に入らなかったのかしら。また不遜な態度に見えた？じゃあ、続きはどうなったんですの、教えてくださいます？なーんて言っただけだったか？・・・いやいや、それはない、ないない。自分でも鳥肌が立つちゃうくらい変なもの。じゃあ何を言ってくるんだ、構えてみたけれど結局青年はそれについて何も言及せず、話の続きを口に始めた。・・・青年も色々諦めたのかもしれない。

「・・・この国は色を重視することが多い。黒や銀、橙や藍色、灰色が高貴とされるんだ。だから、黒い髪を持つおまえと婚約すると言ったところで、表だって反対されることはないはずだ。例えば・・・そう、ジュリエッタのように、神に祝福された娘が舞い降りた、とでも言われるかもしれないな」

「・・・・・・・・」

「だから」

「あ、え、と、ちょっと待って」

ごめん、話を聞いてすぐについていけない。私が馬鹿なのか、話が私の常識の範囲を越えているのか。

さつきから色、色、色って。そんなにここは色で左右される国なの？

王族にとつての結婚は、政略と同義と聞いたことがある。王族は力のある国や貴族と婚姻関係を結ぶことで、国の力をさらに膨大にしていく。それを、嫌だという個人的な感情でどうこうできるのだろうか。

私は、異世界からやって来た。私は力なんて持っていない。私のことを一年間助けてくれたマーサたちだって、王族と釣り合うほどの権力などあるはずもない。この青年が私と婚姻を結ぶ、なんて言っても、いくら黒髪だとはいえ権力をこれっぽっちも持っていない私なんて相手にされない気がするんだけど。そんなに色って重要な？ 権力よりも？ ああ分からない。

「・・・例えばもし、あなたの兄弟がすごく力を持った人の娘さんと結婚したら、そっちに権力が集まっちゃって、あなたがこの国を継げなくなっちゃったりしないの？」

そう、さつき青年は『何事も起きなければ、次の王位の座は俺が即く』と言っていた。でも兄弟のほうが権力があるとなれば、話は変わってくるんじゃないの？ この青年と力のある兄弟とに派閥が分かれて、何か事が起きることだって考えられる。心配じゃないのかしら。

「そんなことどうでもいい」

「・・・え？」

「いや・・・どうにでもなると言ったんだ。・・・他に聞きたいことは」

「え？ ええと・・・」

なんかはぐらかされたような・・・気もするけど。

「・・・さっき、私が日本に帰れるように協力するって言ったよね。どういうこと？私、帰っちゃって良いの？」

まあ、良いなら良いんだけど。むしろだめって言われても帰るけど。でも・・・だって、なんか・・・。

「なんか、私のメリットの方が大きすぎない？」

だってそうでしょ。私がこの青年の、まあ、婚約者、になったとしよう。もちろん仮よ、仮。・・・私は日本に帰れる方法を青年に見つけてもらって、見つかれば次第帰って良いらしい。青年は確かに一時的にお見合い話が少なくなるかもしれない、だけどメリットはそれだけだ。私が帰る方法を手間をかけて探さなきゃいけない、帰る方法が見つかれば私はその時点で帰ってしまうから、そうすればまあお見合い話は増えるだろう。もしかしたら、婚約者に逃げられたと良くない噂が立つかもしれない。そうすれば王位を継ぐのに悪影響が出るんじゃないのかな。・・・ううん、さっきははぐらかされたけど、兄弟が本当にそれなりの権力を持つ人と結婚して勢いをつければ。青年はどうにでもなると言っていたけど、たとえば私が帰らなくなったら王位を継ぐのに何かしらの影響が出るはず。色を重要視するらしいこの国だって、その『色』がどの程度の位置に座しているかは分からないけれど、権力を全く抜きにして物事を判断するなんてことはしないはずだ・・・と思うんだけど。

ああ、この国の仕組みが分からないことがもどかしい。

でも、それにしたって、私のメリット、青年のデメリットが大きすぎるような気がするのよ。

何か、他にも理由があるんじゃないの？何か隠してない？

「ねえ、何考えてるの」

じつと青年を見つめる。青年はしばらく黙って見つめ返していたけれど、一つため息をついた後、ようやく口を開いた。

「頭が良いのか悪いのか・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・まあ、確かに他にも理由はあるさ。だが、ここでは言わん。言いふらさないとは思うが、出会ったばかりのおまえに対して全てを打ち明けるほど、俺は楽家じゃない」

「・・・それは・・・そうかもしれないけど」

「おまえは事を簡単に考えているから、自分のメリットの方が大きいと感じるんだろう。俺の婚約者になるということはおまえが考えるよりも遥かに大変だと思うぞ。もちろん、もとの村に帰ることもできないし、色々な制約も出てくる。自由なんてまるでない。故国にいずれ帰るとしても、当然この国について勉強もしなければいけないし、周囲にそれを悟らせないためにもどの人間にも気を許すことなどできない。・・・それに、いくら厳重警備を強いていようとここは完全に安全な場所だとは言い切ることはできない。どこで盗聴されているか、どこに刺客や暗殺者が潜んでいるか分からない。ここはそういう場所だ。命をかけてもらうことになる」

「・・・・・・・・」

「だからこそ、故国へ帰る道筋を見つけたら俺に構わず即帰って良い。俺もまあ、他にも理由はあるが、見合い話のない一時の平安を謳歌できればとりあえずはそれでいいと思っている。だから、おまえが帰った後の俺の心配をすることはない。・・・どうだ？危険も伴うが、おまえにとっても悪いばかりの話ではないと思うが」

どうだと言われても……。何となくは分かったけど、でも。

日本に帰れるかもしれない、けど、よく物語とかで、王子の婚約者がいじめられたり殺されそうになったりするけど、もしかしたらそれが実際に我が身に降りかかりたりするかも、ってことだね。

命をかけて日本に帰れる可能性にかけるか、日本に帰れるかどうか分からないけれど、命の危険がないこの世界のどこかでのほほんと過ごしていくか……。

困った。今すぐになんて決められないわよ、こんな大変な選択。

「今すぐに決めなきゃだめなの？」

「……なぜすぐに答えが出ない？おまえは故国へ帰りたくないのか？」

「帰りたい、けど！でも、命がかかってる、なーんて聞いたら考えるでしょうよ」

帰る方法が分かっても自分の命をなくしたら帰る以前の問題でしよう。

私の言葉に、ふむ、と考え込んだ青年。そうしてすぐに顔を上げた。

「おまえの怪我は、ジュリエッタの過失によるもの。つまり王族の責任だ。医者にも当然診せるし、怪我が完治するまで、おまえには客人として王城で過ごしてもらおう」

「え」

初耳です。お医者さんに診てもらえるのは有り難いような、でも早く村に帰してほしいような。いや、本当は今すぐにでも村に帰りたいんだけど。

「もし本当に骨に異常があるとすれば、完治するまでかなりの期間を要するだろうな。……最低でも、一月はみたほうが良いだろう」

「・・・ひええ・・・」

鳥肌が立った。考えさせないで！。

「完治するまで待つてやる」

「・・・え？」

「医者が完治した、と判断したその日に俺に答えを寄越せ」

たった今、最低でも一月かかるって言うてなかった？・・・えと、別に急いでいたんじゃないの？青年はすぐに見合い話がなくならなくても良いの？いや、いやいやいや、早く答えを言いたいとかそういうんじゃないんだけど。

「早いに越したことはないが・・・確かに完治する前に婚約すれば、もし刺客が送り込まれた場合、怪我を負うおまえは逃げられないだろう。簡単に命を落としかねん」

「・・・うわ、確かにそうですね。引き受けた場合の話だけどね。言いたいことは分かったわ。一応私のことを案じてくれてるってことでしょ？優しいところもある・・・」

「せっかく手間を掛けて帰す方法を探してやるんだ、それなりには役に立つてもらわないと困る」

「・・・」

「だから早く治せよ」

「・・・」

心配してくれたわけじゃないのかよ。ちつ。ちよつとだけ、ちよびーっただけ見直した私が馬鹿でしたよ。

「ちなみに・・・否、の返事を出したときにはどうなるの？」  
「さあな」

「さあなつて・・・」

「ここまで俺がさらけ出してやったんだ、その秘密を抱えてこれまで通りと同じ生活ができるとは思わない方が良さだろうな」

「・・・・・・・・」

「なあ、王族に対して口も態度もなかなか達者なお嬢さん？」

18才だもんな、意味が分からないほど子どもじゃないよなあ、と憎つたらしく嫌みも混ぜて口にする。・・・暗に、不敬罪だと罪に問うことだってできるんだってこと言ってるんでしょ。それくらい分かるわよ、馬鹿にしないで。・・・脅すなんて、なんて嫌な奴。この青年は選択肢を与えているようで与えていない。もとから否という選択肢なんてなかったのね。取引なんて言った口はどの口だ。にやにや笑ったその顔が憎たらしい。今すぐ刻んだ大量の玉葱をぶっかけて表情を崩してやりたい。私の人生、他人のあんたがそんな簡単に左右できると思うな。

よし、今決めた。絶対否つて言つてやる。日本には自力で帰る。どうせ取引にのつたつて日本に帰れると決まったわけじゃないし、もし方法が見つからなかったら最悪、仮であつてもこの男と生涯を共にしなきゃいけないんだわ。そうよ、そうだわ、むしろその可能性の方が大きいじゃないの！こんな性悪な男とずっと一緒だなんて、喧嘩ばかりの人生を送っちゃいそう。格好良くなくても良い、穏やかな人柄の旦那さんとお話しながらお茶飲んだりゆつたりのおんびり手をつないでお散歩したり、そうやってゆつくりと幸せをかみしめながら年を取っていく予定なのよ、私は。これじゃ人生計画くるいまくりもいいところよ！そんなのぜーったい嫌だからね！

見てなさい、完治したその日！「あんたなんかお断りよ！願ひ下げ！」って部屋に絶対取れないインクか何かででかどかど書いて息ができないほど香水も振りまいて逃げ出してやるわ。私を脅したこと、



後悔すればいい。脅しに屈しない人間だっているってこと、分かせてやるんだから！王族だからって誰もが言うこと聞くと思わないでよね。・・・ああ、まあでも、怪我の手当てもしてくれらしいし、一月付き合ううちにもしかしたら少しは心を入れ替えるかもしれないし、実は良い奴だった、なんてことももしかしたらあるかもしれないから、も・し・も、万が一そうだったら、優しい私はほんのちよつとは考えてあげても良いけれど。

そう、そうまで思ってあげたのに。なのに。やっぱり一言多いんですよ。この馬鹿男。

「ああ、俺の隣に並んで見劣りしないよう、せめてまな板からは脱出してくれよ？」

はい、本日二度目、今度こそ目の前にあった腹立つ顔面にゴン！と頭突きをくらわした。

12 胸がきゅん。あれ、私って女の子だったよね？

鳥の声が聞こえる。ああ、朝だ。

今何時くらいだろう。瞼を閉じていても明るく感じるから、日が昇って結構経っているのかもしれない。こうしちゃられない。朝ご飯に使う食材を畑に取りに行かなきゃ。でもなんだか体が重い。動かせない。どうしてかしら。

そよそよと風が頬に当たって気持ちが良い。さわやかな朝の風。・

・あれ、でもいつもとにおいが違う・・・？

「あの、あの」

・・・・ん？

「あの、・・・さ、桜さま、そ、そろそろ起きられないと」

桜、さま。ええ、確かに私の名前は桜だけれど、さまなんてつけられるくらいご立派な身分なんかじゃないんですが。・・・何かおかしい。

起きて状況を確認めなきゃいけない・・・のに、なんだか起きたくない。なんだか嫌な予感がする。

うつん、でもいつまでも寝てもいられないし・・・し、仕方ない！意を決してカッと目を開けると、目の前には白い天井があった。うん、やっぱりおかしい。だって、私の部屋って木造立てで茶色だったもの。

視界の端で何かが動いたような気がしたのでそつと目を向けると、これまた真白いカーテンが風に揺れていた。これも見たことがない。

ここはどこ？・・・私はだあれ？なんちゃって。ふふふと現実から

目を背けようとしていると、さっきと同じ声が聞こえた。

「さ、さ、桜さま、あの、あの、あのっ……ジェニール王子殿下が」

がばーばさつばさばさー！

「……ああー……ごめん」

はい、目が覚めました。そうでした。思い出しました。ここは王城。私は三日前からここにお世話になっている。昨日も一昨日も同じ目覚め方だった。ああもう、そろそろ慣れないと。毎回毎回布団も落ちちゃうし。

ため息をついたところで横にふと視線を向けるとそこには、目を丸くして立ち尽くす少女。名前はミニエル。

ウェーブのかかった赤い髪がとても印象的。ハの字の眉がいつも困ったような顔に見せていて、守ってあげなきゃと思わせるような雰囲気を持つ女の子。あの馬鹿王子に、ここでの私の世話役に任命されたらしい。

「おはよう……あの馬鹿王子がどうかしたの？」

「え、あ、あの……お、おはようございます。殿下より言付けを頼まれました」

「言付け？」

「ごう、午後にこちらに、お、おいでになるそうです」

「……ふうん」

あの後。そう、失礼極まりない発言に対し制裁という名の頭突きをくらわした後ね。目の前の真っ赤になった顔に、顔と権力と金があ

れば女の子は誰でもときめくと思ったたら大間違いよ！と思うだけじゃ物足りず思わず口に出して叫んだら、あれよあれよという間にこの部屋に連れてこられ絨毯の上にぼーんと投げられ。「大人しくしてろ」と一言、一瞥して馬鹿男はすぐに出て行った。私は怒りの噴火が止まらなくて、馬鹿男が出て行った扉に向かって近くにあった本を思い切り投げつけて。その後、動くのも億劫だった私はふかふかの絨毯の上でふて寝したの。

そして次の日、朝起きるとなぜかベッドに横たわっていた私。体にはいつの間にか包帯が巻き付けてあって、目の前にはこの少女が泣きそうな顔で立っていた。これがミニエルとの最初の出会い。

「あ、あの、わわ、私、ミニエルと申します！今日から桜さまの身の回りのことについてお手伝いさせていただきます！ことになりました！ふつつつか者ではありませんがよっよよろしくお願いします・・・っ！」

・・・緊張しすぎじゃないかしら。別にとって食うわけじゃないんだから。どうしてそんなに泣きそうになって・・・っていうか本当に泣いてるし！私ってそんなにおびえるほど怖く見える！？えええ、そんなの、むしろ私の方が泣きなくなっちゃうわよ。ある意味衝撃的な出会いだった。初対面で私何も言っていないのに泣かれるって、ねえ。ちなみに三日たった今も私に対するおびえはなくなっていない。聞いたところによると極度の人見知りらしく、私に対してだけじゃないみたいなので少し安心しました。この三日で少しは慣れたみたいだけど、緊張してどもるのは当たり前、たまに泣いちゃう世話係ミニエルとだめる私、という構図ができあがっている。

最初、お世話係なんていらなかった。確かに、このお城での生活を教えてもらったり、ご飯を運んでもらったりはしてもらわない

と困るけど、その他、髪を梳かすにしたって髪を結わえるにしたって一人でできるのだし。だから、出会ってすぐに、世話してもらわなくても大丈夫だと言いかけたの。でも言い終わらないうちにミニエルったらぼろぼろと号泣し始めちゃって。自分はやっぱり必要じゃないですよ、モタモタしていて使えないしむしろご迷惑になりますものねなんて次から次へと後ろ向き発言が途切れることなく続き、そんなひどい落ち込みように聞いても見てもいられなくなって、全身全霊をかけて励ましたり誤解を解いているうちに断るタイムिंगを逃し、・・・結局そのままミニエルは私のこの城でのお世話係として定着してしまった。

でも、今となつては、ミニエルにいてもらつてとても助かつてるの。ミニエルによれば、右足の痛みは捻挫、右腕はなんと骨にひびが入っているかもしれないとのこと。ひ、ひえええ！道理で痛みがひどいわけよ。不思議なもので、この痛みを抱えながらあんなに走ったり高いところからジャンプしたりしていたのに、怪我の程度を自覚すると、痛みが一気に増幅したように感じて、少しでも動かすのがすごく怖くなる。そうして今、私はほとんどベッドに貼り付け状態、一人じゃほとんど身の回りのことができなくなっている。ミニエルがいなかったら私、着替えも何もできなくて、とても困った状態だったと思う。

ミニエルはまあ、緊張し過ぎではあるんだけど、それを除けば普通の可愛い女の子なの。お茶の入れ方がとっても上手で、ミニエルの入れるお茶は絶品。美味しいって言ったときの、恐縮しつつも少しはにかんだ顔がとても可愛い。私と同じで甘いものが好きらしく、尋ねれば城下で売られているお菓子のお話もしてくれるし。それに自分ではモタモタして仕事ができないとか言っていたけれど、私は十分な働きっぷりだと思う。ほら、あんな大きなカーテンもささつとまとめられる。私だったらきつと、カーテンに遊ばれてしまうん

じゃないかしら。私よりはずっと器用なのは確かだと思っけどなあ。

そう、それでね、話を元に戻すけれど、あれから一度もあの馬鹿王子には会っていない。私から会おうとも思わないし、あちらからもこれまで何のアクションもない。てつきり怪我が治るまで知らんぷりを決め込むのかと思っていたところだったのに。また取引の話？いや、取引じゃなくて半ば脅しのようなものだけど。

・・・ただ、一つだけ。

「・・・怪我は大丈夫かしら」

その点だけ、実はずっと気になっていた。血はあの後しっかり止まったのかしら。あまりにきつく布を巻きすぎて血が流れなくなつたとか、腕の感覚がなくなつちゃったとか、ないよね。怪我に布がくつついてないと良いけど。私の怪我みたいに、ちゃんとお医者さんに診てもらったのよね？とかって。でも、気になるからってそんなことで呼び出すのもあれだし、ミニエルも何も言ってこないから多分あれ以上大変なことにはならなかったんだろうと思っけいたんだけど。・・・うん、きつと大丈夫、大丈夫。

「はい？」

「ううん、何でもないわ。・・・？どうかした？変な顔して」

「・・・い、いえ、あの、その・・・っ」

「・・・他にも何か？」

「いえっ・・・あのっ・・・」

ああー泣きそうなミニエル。・・・ああ、どうせ、

「食っちゃ寝食っちゃ寝、豚にでもなる気が、とでも言われたんで

しょ」

「えっ、はい！・・・いえ、あのっ」

うーん、ミニエルって良くも悪くも素直なのよね。

「そんなことだろうと思ったわ」

「も、申し訳ございませんっすみません申し訳」

「ミニエルが悪いわけじゃないでしょ？それにまあ、腹は立つけど確かに私も遅くまで寝てたし。ごめんね、気を遣わせちゃって」

「いいいえっ、そんな、ああ謝られないでくださいませっ」

加えてミニエルは私が謝ることが苦手らしい。いつも謝らないでって言われるんだけど、私、高い身分でも何でもないんだけどなあ。私が謝ると、なぜかすぐに泣きそうになっちゃうのよ、この子。泣かれるのは困る。女の子を泣かせるのは趣味じゃないし（男の子もだけど）、どうしてもいいか分からないし、何よりミニエルは泣き始めるとなかなか泣き止まない。それこそ世話は要らないと言った時間なんて、一時間くらい泣いてたんじゃないかしら。一時間よ、一時間！ビツクリよね。むしろ泣き続けるその体力がすごいと最後はもう感心するしかなかったわ。

とりあえず泣かせるのはどうにか回避し、手伝ってもらいながら寝間着から普段用のワンピースに着替える。最初の日にはコルセットを締めて着るようなドレスが準備されていたんだけど、丁重にお断り申し上げた。着るの大変そうだし、何より私にドレスなんてものが似合うはずないし。そうしたら、王城で着るには簡素とも言えるようなシンプルなワンピースをミニエルが準備してくれたの。素材はシルクみたいに光沢があってさわり心地もとても良くて、一目で上質なものと分かるような代物だから、やっぱり着る度に躊躇しちゃうんだけど。でもあのドレスよりはずっといい。

「朝食、ですが、今日はてっ・・・天気もよろしいですし、あ、あの・・・」

うん？腰のリボンを結んでもらいながら振り返ると、顔を真っ青にしたり真っ赤にしたり忙しそうに顔をこころ変えながら口ごもるミニエル。そんなに緊張しなくても、言いたいこと言っていないと思うんだけどなあ。まあ、ふふふ、そんなところも可愛いけどね。思わず胸がきゅんとしちゃう。いやだわ、女の子相手に。でも可愛いんだもん、仕方ないよね。

「そうだね、じゃあバルコニーに用意してもらえる？」  
「あ、は、はいっ」

ぱつと顔を笑顔に変えて、元気に返事をしてからパタパタと朝食の準備に取りかかる。妹ってこんな感じかしら、なんて思いながらぼんやりと見ているうちに、さすがミニエル、あつというまに朝食の準備が終わったようだ。

できました！と珍しくどもらずに笑顔で振り向いたミニエル。思わず私も笑顔になる。

「ありがとう、バルコニーまで手を貸してくれる？」  
「はい！」

さて、じゃあ青空の下で、優雅にブランチといきますか。



### 13 頭で考えるより体がつい先に動いちゃうんです。

「・・・良い天気・・・」

スコーンを片手に、バルコニーの手すりに寄りかかって空を仰ぐ。食事中にちよつとはしたないけれど。まあ、誰も見ていないし大目に見て。

ああ、なんて大きな空。

日本では都会に住んでいたから空は狭かったし、マーサの家も森の中にあつたから、ここまで広い空を見ることはかなわなかった。空が青くて雲が白いのは日本と同じ、だけどこの空は日本には続いていないんだ。

そう思ったら、一人ということもあつて、気持ちが少し沈んでしまった。

そう、今はバルコニーに一人。

さつき、食事中に手が当たって水を入れたポットを倒しちゃったの。それで、ミニエルはこぼれた水を拭いた後、水をつぎ足すので席を外している。

私がこぼしちゃったのに、悪かったなあ。

こんな怪我さえしてなかったら、自分でちゃんと拭けたのに。

あーあ。自分の役立たず具合にため息が出ちゃうわ。

ふと遠くに視線を向けると、街が見えた。

随分と大きい街。こんなに離れていても、賑わっているのが分かる。

お城を降りたところにある街、あれが、城下町、というのかなあ。

この国について、ほとんど何も知らないけれど、あれを見る限りきつとそれなりに大きな国なんだろうな。

なんてぼんやりしていたのがいけなかった。

「あ」

ぼろ、と手から食べかけのスコーンがこぼれる。  
人間の反射つてすごい。何も考えてないはずなのに勝手に体が動く。  
目と、手と、体が無意識ながらスコーンを追う。  
そして。

「ひっ……」

我に返ったときにはもう遅い。

手すりから大きく体を乗り出したことでバランスを崩したけれど、  
片手片足怪我していて踏ん張ることもできず。

落ちる  
！

ぎゅっと目をつぶった次の瞬間、おなかに圧迫感を感じた。

「……一応聞いておく。落ちるのが趣味か？」

「そ、……んなわけないでしょ」

「それは失礼。だが二度も落ちる現場を目撃したんだ、そう思うのも仕方ないと思わないか」

「……好きで落ちたわけじゃ」

久しぶりに聞くテノールボイス。この憎たらしい言葉も懐かしい。

「……ご自分を鳥か何かと勘違いされているようだが、残念なが

らどれほど努力をしたところで飛ぶことはできない。人間だという自覚を持った方が良い」

「な」

確かに一度落ちたし、また落ちそうになったけれど、何でそこまで言われなきゃいけないのよ！

むっとして、ぐいっとならに首を回すと、そこにはやっぱり、予想通りの、ジェニールの顔。

予想と違っなのは、・・・全くにやついておらず、厳しい表情をしていたこと。

「後日また医者に診てもらっ予定だが、腕の方はやはり骨に異常があるだろっという話だ。ミニエルに伝えておいたから、既に聞いただろっ？」

「・・・」

「怪我の程度を自覚する前、自覚した後では痛みの感覚が違っ上、自覚した後は無意識にその怪我を庇おっとする」

「・・・」

「前回と同じ場所と同じように飛び降りても、骨に異常があると知ってしまった今は、無事に着地することなどまず無理だろっな」

「でも・・・いや、それはそうかもしれないけど・・・」

「しかもこの下は、あの時のように刈り込んだ木もなく芝生のみ。さらに、前回よりも階が高い。どうして助かると思っ」

「う、いや、助かるっというか、今のはつい反射的に・・・」

「食べ物を落として反射的に手を伸ばしてバランスを崩して落ちて？それで天に召されたとなれば、とんだ笑い話だな」

腹は立つけど、確かにその通りなので言い返すことができない。確かに、確かに、その通りなんだけど、だけど。

「常に自分に周りに気を配って過ぐせ」

「・・・・・・・・」

「ここは、以前も話したが、ただでさえ他者から命を狙われるかもしれない危険な場所だ。自分の身は最低限自分で守ろうと努力しろ。他ではどんなに間抜けでも良いが、命に関わることだけは迂闊にするな」

正論だ。そして、多分、ジェニールは私のことを案じてくれているのだと思う。多分。今度こそ。

嫌みな言葉ばかりをぶつけてくる嫌みな奴かと思っていたけれど、実はそれほど憎たらしい奴ではないのかもしれない。

・・・今更素直に言うことを聞くのはちょっと嫌だったけど、

「・・・・・・・・分かった」

今回は確かに私が不注意だったから。素直に頷いた。

私が頷くのを見たジェニールは、お腹に回した手に力を入れて、ようやく私をもとの体勢に戻してくれた。

さっきまでジェニールが少しでも力を抜けば落ちてしまうような体勢だったのよ。ああ怖かった。

改めて、手すりにつかまりながら振り向くと、相変わらず背の高いジェニールが立っていた。

何となくバツが悪いけど。でも、ジェニールがいたから助かったんだし、素直にお礼を・・・。

ん？

あれ？

「どうしてあなたがここにいるの？」

だって、ご飯食べてるときにはいなかったよね？

えええ、不法侵入・・・！？

「違う」

「え、いやだって！」

「何度もノックしたが、出てくる気配が全くない。扉に錠も下りていないし、中を見ればおまえが体勢を崩すところだった」

「・・・いや、結果的には助かったんだけど・・・もしその時私が着替えとかしてたらまずいでしょ」

「おまえの着替えなんぞ見ても何も嬉しくもないし、何より午後に尋ねると伝言をしたはずだが」

「・・・ああ」

さらっと腹の立つ言葉を言われたような気がするが、自分の精神衛生上あまりよろしくないで私もさらっと受け流す。

「・・・そういえば、訪問の話をミニエルに聞いた気がする。こちらもさらっと耳から流していたけど。」

「食卓の様子からして、ランチか。随分と寝坊助だな」

「・・・女は十分睡眠をとって、美容に気をつけているのよ」

「まあ、そういうことにしておいてやってもいいが。俺の妻になる前に、食っちゃ寝食っちゃ寝して豚になるなよ」

「だーかーらっ」

一言多いのよ！妻にもならないし！

ばすっとなでジェニールのお腹を叩く。いたた。うっ、この手応えだとほとんど脂肪がないような気がする。

面白くなくてぶすつと横を向くと、ちらと白が目に入った。

黒い服の黒い袖からちらりとのぞく白。ああ、これってもしかして

「……………」

「ん？なんだ」

「その、腕……………」

「腕？…………ああ、」

ジェニールが少し袖をまくる。そこには、痛々しく包帯でぐるぐる巻きになった左腕が。

手を伸ばして触ろうとしたけれど、やっぱり手を引っ込めた。

だって、……………痛みを感じたら、悪いし…………。

「別に、こんなもの怪我のうちにも入らないさ」

「こんなものって、だってあんなに血がどばどば出たじゃない」

「血は止まっただろう？…………ああ、一応礼を言っておく。止血、助かった」

「……………別に」

だって私を庇ってつくった傷だし。

ジェニールが左手を握ったり開いたりしてみせる。良かった…………。左手、ちゃんと使えるみたい。

「まだ痛い？」

「いや…………痛みはもうないな」

自分のせいで誰かが傷つくのは、やっぱり嫌なもの。

傷が、早く完治しますように。

と思っていたら、無意識のうちに包帯の上から触ってしまっていた。

「あ」

「・・・別に触って悪くはないが。今も特に考えてのことじゃないだろう。無意識な行動が多いな、おまえは」

「・・・・・・・・」

いや返す言葉もございません。

ただ今までこれでやってきて、なかなか今更直せないんですよ。やっちゃった、と思いながら手を離そうとし、包帯の上に置いている手がほんわり温かくなっていることに気がつく。

温かく？・・・いや、熱い、ような。

「あれ・・・ねえ、熱もってない？なんか熱いんだけど・・・」

「気のせいだろう。それかおまえが熱いんじゃないか？」

「え、じゃあ私？私が熱ある？うーん・・・いやいやいや違うから！私たくさん寝てピンピンしてるし！ねえ、ごまかしてない？」

「ごまかしてない」

「うそ」

「嘘じゃない。まあ、まだ怪我して数日だし、熱を持ってもおかしくないが」

「あれ、顔も少し赤くない？ねえ、ちょっとおでこ触らせて」

「・・・嫌だ」

「触らせて」

「嫌だ」

「ちよつとだから」

「嫌だ」

「熱あるんでしょ!？」

「ない。おい、触るな」

「もう！妻にしたいんじゃないの!？妻を拒否するの!？」

「今は赤の他人だろう」

「こんな時だけ自分の都合の良いようにするし!」

「事実だろう？」

「事実だけど！ああ言えばこう言う！」

「おまえもな」

「……そろそろ失礼しても良いかな、お二人さん」

「！？」

聞いたことのない第三者の声に驚いて、ついジェニールの服を掴む。声が聞こえた扉の方をそろりと向くと、赤い髪の男性が立っていた。誰だろう。知らない人だ。

この人は……いい人？それとも、悪い人？

にこやかな表情をしていて一見柔和に見えるけれど、前回のバミアスの件以来、優しそうな雰囲気の人に警戒心を抱くようになった。人間不信になってしまったようで、そのことを少し残念に思うけれど、でも誰が味方が敵かも分からないこの世界で生きていくには仕方のないことなのかもと腹をくくった。

ジェニールも、赤い髪も、見つめ合ったまま何も言わない。ああもう、どっちなの、いい人、悪い人？

とりあえず、視線は赤い髪から逸らさず、ジェニールの背中に隠れてみる。

それでも、ジェニールも赤い髪も口をきかずに見つめ合ったまま。

ジェニールを見上げると、金色の髪からちらりとのぞいた耳が少し赤みを帯びているような。

……やっぱり熱あるんじゃない？

そう思っ、おもむろに左手を伸ばして耳に触れ……ようとした、んだけど。

「……つく、くく、ぷぷぷ……」

「え？」



もう一度視線を赤い髪に戻すと、お腹を押さえて笑っていた。あれ？  
ジェニールを見上げると、赤い髪から視線を外して、今度はこちら  
を向いていた。呆れた表情付きで。

あれ、私なんかした？

「・・・おまえ、さつきから何してるんだ」

「え、え？」

「今何しようとした？」

「え？あ、ええと、耳が赤いからやっぱり熱があるのかなあと」

「・・・おまえは今、何かまずい雰囲気だと察したから俺の  
後ろに隠れたんじゃないのか」

「う、うん、そうだけど」

「・・・阿呆」

「な、何で!？」

「そんな緊迫した空気の中どうして俺の耳を触るっていう行動に移  
れるんだ。どうせ気づいたら手が伸びていた、とかそういうオチだ  
ろっ」

「え？ええつと・・・」

「もつと気を配れと言ったばかりだろう！もしあいつが敵で、俺が  
おまえが触った耳に注意を向けた一瞬の隙に切り込まれたらどうす  
るんだ」

「・・・ええつと」

はい、今のは私が悪かったです。だって気になったんだもん。  
でもこれからは、今度こそこれからは、気をつけます。

冷や汗を垂らしてへらりと笑った私を見て、ジェニールはこめかみ  
を押さえてため息をついた。

それを見て、初めて心の底から申し訳なく思っ、今回はかりはし  
っかりと反省しようと決めた。

「すみませんでした」

「・・・以後気をつけてくれ」

「頑張ります」

断言はできないけど、頑張ります。

その言葉に、ジェニールはまた軽いため息をついてから、未だに笑い転がっている赤い髪に視線をやった。私も倣って赤い髪を見る。

「あの笑い上戸は？」

「・・・あいつは、俺の異母弟の」

「ふっ・・・ぷ、ぷぷ、いや、・・・兄さん、僕が自分で自己紹介をしますよ」

ああ、やっと笑いが止まったみたい。顔は相変わらず笑ってるけど、ジェニールも知ってる人だし、悪い人じゃないみたいだけど・・・やっぱりまだジェニールの服は離せない。

「そんなに警戒しなくても良いのに」

「・・・初対面であれだけ笑われたら警戒するんじゃないか？」

いや、そういうので警戒してるんじゃないけど。

でもあれだけ笑われて面白いわけもなかったから、反論はしないで赤い髪の言葉を待った。

「まあいいか。僕はね、兄さんの弟、っていうのは変か。この国の第二王子、ルークセディル。ルークスで良いよ。兄さんから見れば、僕は母親の違う弟。・・・ジュリエッタが馬で人を轢いて兄さんが助けたと聞いてはいたけれど、それがこんなに可愛らしいお嬢さんだとは思わなかったな」

「・・・ええと・・・」

弟、さん。

ジェニールを見るけれど表情に変化はない。きっと赤い髪 of 言っていることは嘘じゃないのだろう。

それじゃあ、警戒しなくても大丈夫かしら。

そつとジェニールの服を握っていた手を解く。

「お嬢さんの名前を聞かせていただけける？」

「え、つと・・・桜、です」

「さくら？この辺りではあまり聞かない名だね」

「あ、あの、生まれはこの国じゃないから・・・」

「そう。桜、ね。可愛い名前」

「・・・・・・」

こんな言葉を面と向かって言われたことなんてないから、反応に困って視線が泳いでしまう。

そうして、はつと気がつく、いつの間にか目の前に迫ったルークスが、先程ジェニールの服を離れた私の手を取っていた。

「それじゃあ、お近づきの印に」

赤い髪の、顔の、唇が、手の甲に。

「ひ、」

「あ」

前者は私が息を吸い込んだ音、後者はジェニールの呆けた声。

その直後。

悲鳴と共に、バチンと気持ちの良い大きな音が、部屋に響き渡った。

## 14 求婚してもっとロマンティックなんじゃないの？

「だーかーらー、悪かったよ。外見から少し幼いお姫さまだなあと思っただけで、まさかこんなにウブだとは・・・って、ええっ、どうしてそこで怒るの!？」

「・・・」

「ええ、今僕なんかした!？あ、ああ分かった、怒ってるんじゃないくて実は照れているんだろう?そんなアグレッシブな照れ隠しをする君もなかなか魅力的・・・」

「・・・」

「ごめん、多分僕が悪かった!だから、さ、皿!皿を下ろして!」  
「・・・」

「兄さんも!ちょっと笑ってないで止めてください!」

「いや・・・くく、ははは」

「はははじゃなくて!」

兄がこれなら弟もこれだ。私を何度幼く見れば気が済むんだこの兄弟は。

ほほに赤い紅葉を浮かび上がらせてなお口の減らない赤い髪。しかも歯が浮くような言葉ばかり。鳥肌が立ちまくってしょうがない。この赤髪、女たらしに違いないわ。

「ちよっちよつと待って桜姫、落ち着こう、落ち着こうよ、ね!何が悪かったか分からないけどとりあえず謝るよ!」

「とりあえずって何」

「い、いやとりあえずじゃなくて・・・う、ウブって言ったことが気に障ったのかい?それとも・・・」

「・・・あのね・・・」

確かに男の人に不慣れだし、確かにウブで、確かに気に障ったのは事実だけど。  
ただどねえ、

「私はそこまで幼くないし、初対面で了承もなしにいきなり人の手にキスなんかしないで！」

さっきのことを思い出して、もう！と勢いで皿を振り上げた。けど、パシ、と手首を掴まれた。頭上を仰ぐと、ジェニールが苦笑していた。笑い、おさまったのね。そういえば赤髪に対する怒りで流しちやっただけど、ジェニールも人並みに声を出して笑うのね。貴重だったかもしれないのに。しっかり見ておけば良かった。

「・・・確かに慣れないおまえに対してルークスが先走りすぎたとは思うが、その辺にしておいてやってくれ。弟も悪気があったわけじゃないんだ」  
「・・・」

まあ、悪気があったらさらに困るけど。

うーん・・・この世界じゃ、相手の手にキスするのなんて習慣化されたようなものなのかしら。そういえばおとぎ話とかでも貴族や王子さまがお姫さまたちによくしているよね。それを考えれば、この赤髪もジェニールも一応王子さまらしいし、あのキスだっていつものことなのかもしれない。

私も、そんなおとぎ話のような世界に昔は憧れていたっけ。だけど、実際に体験してみても思い描いていたものとは違うらしいと分かった。たかが手の甲にキス一つでこんなに騒ぐなと思うかもしれないけれど、でもね、手に感触だつて残るんだよ。好きでもない人の唇の感触が！

想像してみても嫌じゃない？私は・・・嫌だったの。

それでも、確かにジェニールの言うとおりルークスは悪気があったわけじゃないんだろう。軽いあいさつのつもりだったのかもしれない。

日本があつた世界の、欧米や欧州あたりで育つていれば、もしかしたら違和感を感じなかったかもしれないけど、そんな文化のない日本でその中でも地味に育つた私には恥ずかしすぎる行為。

でも・・・この世界じゃ異分子は私なんだよね。嫌でも慣れなきゃいけないのは私。嫌でも理解しなきゃいけないのは・・・私。ああもう、文化が違つてやっかいなあ。

仕方がない。嫌だっただけ、私もついビンタしちゃったし、お互いさまということで。お皿も元の位置に戻す。

「そ」

「そう、そうそう社交辞令、あいさつだよ。今はまだ慣れないかもしれないけれど、君がもっと大きくなって、もちろん今でも十分可愛いんだけど、もっともって大人の素敵なレディになったら・・・」

「

・・・またこのパターンですか。この兄にしてこの弟あり、一言多いのは遺伝なのかしら。

「18よ」

「え？」

「18ですけど。大人の素敵なレディって、何歳からかしら？」

にいいつこり。笑つてやると、赤髪は目を見開いた後、鮮やかな髪の色とは正反対に青白く血の気が引いていった。

「18!？」

「ちよつと、人を指差さないでよ」

僕と同じ年だなんて・・・！！と人を指差して驚愕する赤髪。ちよつと、そこまで驚くのものすごく失礼だって知ってる？私だってあんたと同じ年だなんて心外よ。指をばしつと払ってにらみつけると、両手を挙げて苦笑いで降参ポーズ。・・・全く。

あーあ、私ってそんなに幼く見えるのかな？日本人だから余計に童顔に見えるのだろうけど、この世界の１８才に見えるにはどうすればいいんだろう。化粧するとか？・・・やり方知らないけど。しかもこの世界の化粧もこういうものか知らないけど。うーん、と上を仰いでいると、ジェニールが口を開いた。

「・・・それで、ルークスは何の用だ？」

「え？」

「何か用があつたんじゃないのか？」

その言葉に、赤髪がパツと顔を上げる。あんなに青白かった顔色は元に戻っている。立ち直りが早いわね。

「そうそう！兄さんをノワールが探してましたよ」

「ノワールが？」

「はい。兄さん、病床を抜け出してきたんでしょう？珍しくノワールがこーんなに目をつり上げてそれはもう鬼の形相でカツカツと足音高らかに歩いてましたよ」

「・・・・・・・・・・」

おや、珍しい。と言えるほどジェニールを知っているわけじゃないけれど。

ジェニールの顔から血の気が引いていく。さっきの赤髪みたい。



ん？病床？

「・・・・・・・・・・ジェニール」

「・・・・・・・・・・なんだ」

「・・・・・・・・・・おでこ」

「触るなよ」

「病床を抜け出したって。やっぱり熱あるんでしょ」

「ない」

「嘘」

「嘘つきー」

「ルークスは黙ってる」

「ねえ赤髪の王子さま、この人の病状は？」

「おい」

「ルークスだよ、桜姫。怪我のほうは血も止まって化膿もせず落ち着いているけど、熱がなかなか引かないんだ。食べるものは食べてるし、しっかり睡眠もとっているらしいけど、ずっと熱が引かない。ふらふらして本当は歩くのもやっとなはずだよ」

「ルークス！」

「ジェニール！」

なんでしらばっくれようとするの？

「女のおまえのほう为重傷なのに男の俺のほうに熱が長引いているなど格好がつかない」

「・・・・・・・・・・」

「なーんて馬鹿な理由で嘘ついてるわけじゃないわよね？」

「・・・・・・・・・・」

「あ・の・ねえ、いったい誰に格好つける必要があるのよ。それに・  
・そんな状態でどうしてここに来たの？用事って何？言伝じゃだめなの？」

「・・・・・・・・」

じつと見つめると、ため息をついて視線をそらした。  
ああまたしらばっくれようとする気じゃ・・・。

「ちよつと・・・」

「ジェニイル殿下」

「!？」

部屋の中に静かな声が響き渡った。

ひえ、また新しい人が来た！ぱつとジェニイルの背中に隠れる。  
そろつと扉を見ると、今度は日本でもよく見たことのある茶髪をした青年が立っていた。顔立ちは日本人とは全く違うけど。

「ジェニイル殿下」

「・・・・・・・・ノワール」

苦虫を噛み潰したようにジェニイルがつぶやく。

ああ、この人がさっき会話に上ったノワールって人か。

それにしても、ジェニイルのこの嫌そうな顔は何だろう。・・・悪い人ってこと？

「桜さま」

「へ、あ、私!？」

突然振られてびっくりだよ！思わず背筋を伸ばす。

「お初にお目に掛かります、桜さま。私はノワール・スクールンディ・ノワールと」

「ノワール・・・さま」

おそろおそろジェニールの陰から出ると、ノワールと名乗った青年の目尻が少しゆるんだ。

「私は王族ではありませんから敬称をつけなくて結構ですよ」

「ええと、・・・ノワール・・・さん？」

「はい」

「あ、わ、私も王族じゃないから、さまなんてつけなくて・・・」

「桜さまは客人としてこちらに滞在しておられますからよろしいのですよ」

「は、はい」

「私、ジェニールさまの側近を務めております。どうぞお見知りおきを」

「えと。・・・は、はい。よろしく願います」

頭を下げられて、つい私もぺこりと頭を下げる。

ジェニールも否定してないし、悪い人じゃ・・・ないんだよね？  
そつとジェニールの顔をうかがうと、まだ渋い顔をしていた。

「ジェニール・・・」

「ジェニール殿下。花のように可愛らしい姫のもとへ通いたい気持ちは重々お察し申し上げますが、ご自分の体調も少しは考慮していただかないと。姫も殿下が体調が優れぬと聞いては申し訳なく思われてせつかくの逢瀬も台無しとなりましょう」

「……………」  
「……………」

……………。ああいけない。口が開きっぱなしでした。

舌がよく回りますね、ノワールさん。この国の男は赤髪といいこんな台詞を言うのが好きなんです。ああでもジェニールは違うかなあ。

そのジェニールは、引き続いてものすごく嫌そうな顔をしていた。ああ、うん。分かるかも、その気持ち。さっきからの渋い顔の意味も、なんとなく分かったよ。

「つきましては、桜さまには大変申し訳ありませんが、ジェニール殿下は未だ体調も優れませんので、部屋で休んでいただきたいと思うのですが……………」

「え、あ、私？」

「ジェニール殿下を大切に思われる桜さまでしたら、もちろん許可していただけますよね？」

部屋中の視線が私に集まる。

「……………ええと、はい」

あ、別に大切に思ってるのかそういうんじゃないから。雰囲気気圧されて返事をしてしまいました。はい。

ノワールは私の返事が満足のいったものだったようにつこりと笑う。

そして、さあ、とにこにこ扉の前でジェニールを待っている。ジェニールはというと。

「・・・・・・・・」

恨めしそうに私の顔を見ながら、はあとため息をこぼし、扉に向かうと体を翻した。

その背中を見た瞬間、つい手が伸びた。

「あ」

「・・・・・・・・また、無意識、か？おまえそろそろ」

「ち、違う違う！あの、あのね、」

手が伸びたのは確かに無意識だったけど、でも聞きたいことはちゃんとあるんだよ。

掴んだ裾をぎゅうつつと握って、ジェニールの顔を見上げる。だけど、ジェニールはまだあちらを向いたまま。私から見えるのは、ジェニールの後ろ頭だけ。

「まだ・・・何の用か聞いてない」

「・・・・・・・・」

熱出してるのに、無理して訪れた用事は何だったのか、まだ聞いてないよ。

気になるじゃない。

「・・・次に訪れたときに話そう」

「それは、」

「ああそつえば」

そこでようやく、こちらを見た。なんだかほっとして手を離す。今度はジェニールの手が伸びて、頭に乗った。ちよっと重い。手が大きいから余計に重いのかしら。

「思いの外以前通りで安心した。・・・元気なのもいいが、あまりミニエルに心労をかけるなよ」

そう言い残し、再び背を向けて茶色の青年とさつさと部屋を出て行ってしまった。

扉は開いたまま、閉めた方がいいのかなと思うけれど、体が動かない。

だって、ジェニールが笑ってて、びっくりしたの。苦笑でもニヤリでもなく、普通に笑ってたんだよ。

いつも、ああいう風にしていたらいいのに。

なんだか頭が、手が触れていた部分が熱い、気がする。

・・・やっぱりジェニール、熱高いんだわ、きつとそう。

視線の端で何かが動いた。視線をやると、・・・ああ。

「まだいたの」

「まだいたのって・・・それはないんじゃないかい、桜姫」

「ジェニールたちと一緒に行ったのかと」

「兄さんたちがいなくなるところばっちり見ていたじゃない。明らかに、僕そこにいなかったでしょう。つれないねえ、桜姫」

「女たらしの赤髪の王子、用事は済んだんでしょう？出口はあちらよ、どうぞ」

「女たらしって・・・。ああ待って、兄さんだけじゃなくて桜姫にも用事があったんだよ」

その言葉に振り返る。私に用事？こんな女たらしが？

「私は用事なんて」

「ほら、これ」

「・・・・・・・・」

差し出されたのは、食べかけのパン。どこかで見覚えのあるような・・・。

思わず受け取って、じいじと見つめてみる。

「あ」

「そう、君がさっき落としたパンでしょう？」

「そう・・・かもしれないけど。どうして？」

確か・・・さっき、バルコニーでこれを落として私自身も落ちそうになったんだ。

パンのことなんて頭からさっぱり抜け落ちていたけれど、  
でもどうしてこれを赤髪が？

「昨日もバルコニーでランチをしていたね。僕はその時も中庭にいて、たまたま見上げたところに君がいた」

「・・・・・・・・」

「遠くてはつきりとは見えなかったけれど、愁いに沈んでいるようだった。何を悲しんでいるんだろうと気になって、一晩中君のことばかり考えていた。そしてさっき、再び中庭にいたら頭上からパンが落ちてきた。何事かと見上げたら・・・一晩中思い続けた君が落ちそうになっていた」

「・・・・・・・・」

「それはもう驚いたんだよ。兄さんが助けていたから大丈夫だとは思ったんだけど・・・つい、ね。気になるお姫さまにお近づきになるいいきっかけも手に入ったことだし、早速逢瀬を楽しもうと参じた次第さ。その途中でノワールに会ってさ。兄さんに用事らしかったから、兄さんを追い出すのにちょうどいいと思って。そうして僕のにらんだとおり、兄さんはノワールとともに退室し、今は姫と

「僕の二人だけ」

まあ、確かに二人だけ、ね。

あれ。・・・もしかして、ちよつとまずい状況なんじゃないだろう  
か、これ。

「大丈夫、無体なことはいないよ。乱暴は嫌いなんだ。・・・そう  
それで、思った以上に元気なお姫さまだったけれど、思っていた通  
りの可愛い姫であることには変わらない」

•  
•  
•  
•  
•  
•

「ということで、君に結婚を申し込むよ。大丈夫、二番目だけれど王子だから、生活に不便は感じさせないよ。可愛いものは大好きなんだ。もしかしたら側室になっちゃうかもしれないけど、僕から言い出したことだし大切にするよ。理由？君のことが気になつて仕方がないんだ。それじゃあだめ？結婚して自分のものになればきつと、気持ちが悪くなくないかなあつて」

堂々と馬鹿なこと言ふな。どんな理由だ。そもそもそんな理由聞いた了承するお馬鹿さんがどこにいると思うんだ。そんなの、気になる玩具が手に入らなくて落ち着かない子どもと同じでしょ。私は物じゃないし、玩具じゃないし、玩具のように簡単に手に入ると思つたら大間違ひよ。しかも側室つて。何が何でもお断りよ。

「……この国の王子って、一言目には失礼な言葉、二言目には求婚の言葉しか出てこないのかしら。赤髪に限っては口を開く度に失礼で馬鹿げた言葉しか出てこないけど」

「……………それって」

「あ」

いけない。ジェニールとのあの話はまだ返事もしていないし内緒なん



だった。

でも口に一度出てしまった言葉は戻せない。

「ふうん、兄さんがねえ。・・・これはまた珍しい」

「あ、いや、ええと・・・」

赤髪の細い目がさらに細くなる。

ああ困った、どうしよう。ばれちゃった、よね。

「それじゃあ、むしろ燃えちゃうね」

「は？」

「見たところ君はまだ兄さんのものになってないみたいだし」

「まだって・・・」

「僕、兄さんには負けたくないんだよね。兄さんのものにはさせないよ。ねえ、僕を選んでくれるよね」

そう言つて、にこりと笑う赤髪。

私の気持ちを無視して勝手に話を進めるな。今度は兄に対するライバル心で私を手に入れたいつて？だから馬鹿も休み休み言え。兄に負けたくないとかそんなの私には全くこれっぽっちも関係ないから。私はあなたの都合のいい道具なんかじゃない。

自分が選ばれると当然のように思い込んでいることが腹立たしい。握りしめていたパンを思い切り顔面に投げつけて、空いた手で出口を指差す。そして、まさかこんな行動に出るとは思わなかったんだろつ、目を見開いて突っ立っている赤髪に向かって、にこりと上品に笑ってみせた。

「他を当たりなさい。帰れ」

## 15 混乱したら、温かい飲み物でほっとひと息。

ようやく、テラスの椅子に座る。

テーブルの上には食べかけのスコーンにハムにデザート。

紅茶に口をつければ、既にぬるくなっていた。

ミニエルが煎れ直すと言ってきたけれど、もったいないからとやり断って飲み干した。

ああ、でもできれば温かいまま飲みたかったなあ。

結局、あの赤髪は私に言われたとおりに部屋を後にした。

姫君の機嫌が良いときにでも出直すよ、考えといて、なんて言いながら。

もちろん、二度と来るなと赤髪が持ってきたスコーンを背に投げてやったわ。ふん。

全く、この国の王子はろくなやつがないわよね。

王様だったらどういう教育してるのかしら。

この国の人たちは結婚をどう考えてるんだ。

結婚って、神聖なものじゃないの？

私が幻想を抱いてるだけ？

「・・・ねえミニエル」

「は、はい、桜さま」

「この国の結婚のシステムって、どうなってるの？」

「え、ええと、あの、し、しすてむ、でございますか？」

「ああ、システム・・・じゃなくて、うーんと、そうだなあ、この国は多夫多妻制なの？あと、男の人が優勢とかってあるの？相手の女の人の意思って、関係ないの？」

ジェニールも、赤髪も、出会ってすぐに求婚、といって良いのか分

からないけど、してきた。

でも、結婚って、そんなに簡単にできるものなの？

まあ、日本だって出会って初日だろうが、結婚しようとなって婚姻届さえ出してしまえばすぐに結婚したと見なされるわけだけど。

でも、日本において、出会ってすぐにプロポーズする人なんて、そうそういないんじゃないかしら。

それがこの世界では、もしかしたら、結婚ってそんなに責任や覚悟のいるものと思われていないのかもしれないよね。買い物のように手軽なものと考えられていたら。うん、そうだったら二人の行動も納得できるわ。まあ、そうだったらこの世界が嫌いになりそうだけど。

そんなことを思いながらミニエルの言葉を待った。

ミニエルは、口を開けたり閉めたり、どう説明しようか一生懸命考えているみたいだったけれど、しばらくしてようやく話始めた。

「あ、あの、私が、知っている限りのことしかお話できませんが・

・。あの、平民同士の結婚は、一夫一妻制、でございます。役所へと届け出、婚姻が成り立ちます」

「日本とほとんど同じなのね。じゃあ、王族は？」

「お、王族の方々は、一夫多妻制でございます。あの、過去には、側室を一人も持たず、王妃さまお一人だけを愛された方もいらっしやったようですが、私の知る限り、先代、現国王さまは、側室の姫さま方とお過ごしでいらっしやいます」

「・・・ふうん」

「その時の国王さまが承認となって婚姻は成り立ち、その後婚儀の宴を開かれることが通例となっております。王妃さまには他国の王女さまや高位の貴族のご令嬢が、側室には貴族のご令嬢が多いですね」

「現国王は？」

「はい、ええと、国王さま、王妃さま、側室の方々は八名いらっし

やいます。も、もちろん、国王さまは王妃さまは言うまでもござい  
ませんが、側室の方々皆さまを大変愛していらっしゃるとのお話を  
よくお聞き致します」

「は、八名!？」

王妃さまと合わせて九人も奥さんがいるの、国王さま!

うわ、どれだけ女好きなのよ!

まあ、奥さんが多い分、もしかしたら子どもがいっぱいできて、政  
治にも利用できるし、跡継ぎも確実に産むことができて、国が安泰  
だ、なんてこともかもしれないけど。

どおりで、赤髪が、側室に、なんて軽々しく言えるわけだ!

確かに、他国の王女さま方がつくような正妻の座に私がつけるわけ  
がないわね。なれて、赤髪が言うように側室だわ。むしろ身分的に  
下働きがいいところじゃないの。

思わずため息をつくとき、ミニエルが慌てる様子が目の端に映った。

ああ、別にミニエルにがつくりとしたわけじゃないから。

一応フォローを入れて、ふと頭上を見上げた。

ああ、さつきと変わらず青空が広がっている。

全くどうして、こんなことになってしまったのかしら。

あの時、井戸にさえ落ちなければ。近道をしようとさえ思わなけれ  
ば。

でも、今更そんなことを思ってもどうしようもないのも事実。

これから何をすればいいかを考えるほうが得策だよね、と気を取り  
直して。

よし、じゃあ状況を整理してみよう。解決に向かう糸口が見つかる  
かもしれないし。

ええと、まず、私は今怪我をしていて動けません。それがまず前提  
で。うわあ、最初から泣きたい。

・・・今のところ、日本に関する手がかりは一つもないのよね。

この世界にきた最初の頃こそ、落ちた場所のあたりを探したけれど、何一つ掴むことはできなかった。

不思議だったのが、日本語が通じること。

だって、日本にいたときだって、国変われば言葉だって変わったのに、この世界は日本語で話することができる。

口の動きを見ても、違和感を感じることがない。

じゃあ、ここは日本？とか考えたこともあったけれど、まずそれはないよね。

ああこれは考え出すと止まらないから、ここでやめとこう。  
で、マーサたちに出会って。

日本について訪ねたことはなかったけれど、まず知らないだろうな。約一年間、私のことを見守ってくれて、この世界のことを色々と教えてくれて。

マーサたちが営む宿屋に来たお客さんにそれとなく異世界の話を振ってみたけれど、笑い話で終わってしまった。

そうして、どうにかこの世界の常識を知って、日本に帰ることを諦めるしかないかもしれないと思い始めていた時に出会ったのがジェニール。

異世界の話をしたら、いきなり求婚してきて。求婚を受けるなら、日本について、書物や落ちた土地に赴いて調査すると言ってくれた。まあ、もちろんそこに愛はなくて。本人も言っていたけれど、契約なんだろう。ただ私が他者に狙われるかもしれないっていうリスク付きらしいけど。

あと、赤髪。

まあ、多分この世界では珍しいらしい黒髪の私が少し気になって、あと兄に負けたくないライバル心で求婚してきた、ジェニールよりも馬鹿な男。気になって、っていうのも、気になる玩具が全部欲しいっていう子どもと同じものなんだろう。ああ、なんて幼い。

とりあえず、日本に帰る可能性がパーセントでもあるのは、ジェ

ニイルなんだよね。それは、間違いない。間違っても赤髪はない。絶対ない。

ただ、やっぱり気は進まない。当たり前でしょ？知らない人と結婚なんてしたくない。

ジェニイルと結婚という名の契約を交わして、もし日本に帰れたとして、好き合う相手が見つかって、結婚するとなっても、日本では一応初婚だけど、私の心の中の履歴書では再婚になっちゃうわけよ！嫌だ！

だからといって、私も、ジェニイルもだけど、一生添い遂げる気は、全くないし。

それに、ジェニイルの案に乗ると、命をかけるというリスクがつく。何か護身術でも習ってれば良かったけれど、今更言ってもどうしようもない。

何一つ身を守る術のない私は、きつと刺客なんてものが来たらイチコロだ。

それほどのものをかけて、日本に帰りたいのかなあ、私。

友だちもいる、思い出もいっぱいある、それでも、日本に帰るために命を落としたら、後悔しないと言い切れる？

「……………わかんない」

わかんないよ、そんなこと。

だって、この世界だって、好きになっってきたし。

今はちょっと違うけど、マーサのところに行ったときには、自然に囲まれて、とても穏やかな気持ちで過ごせて、幸せだった。

このまま、マーサの宿屋で働いていたいと思うほどに。

この王城内だとも落ち着かないけど、だけでももしかしたら、平民の中に紛れれば、この世界の常識を身につけた今、友だちや、ちゃんと好きになれる伴侶を見つけられるかもしれないし。

「・・・あ」

そうだ、無理だ。私、黒髪だった。黒髪って、なんか、特別だとか言ってた気がする。

じゃあ、穏やかな生活は望めない？それなら、染めればいいか。いや、結婚してずっと一緒に生活していったら染めてることさすがにばれるか・・・。そもそも、この世界って髪染めるっていう習慣があるの？

そこまで考えて、また一つため息。

やっぱり、王城から降りていっても、休息の地は見つけられるとは限らないらしい。

いつそ坊主になるか。嫌だ。まだ18歳の乙女なんだから。

コポコポ、と音がして、その方を見てみると、ミニエルが新しく紅茶を注いでくれていた。

にこにこと差し出されたカップを受け取って、一口含むと、紅茶の良いにおいが口の中に広がった。

ああ、落ち着く。

行っでは戻り、行っでは戻りで、頭の中が混乱して少し疲れてきていた。

少し落ち着こう。

ありがとう、ミニエル。

ほかほかと体も温かくなってきた、どこからかこみ上げる安心感に、目を閉じた。

『全く、あんた一体どこまで行ってきたのよ！方向音痴も度が過ぎるわ！』

（涙をためながら勢いよく抱きつく美和。黙っていなくなつてごめんね、ごめんね。ちよつと異世界行つてたわ、なんて言つたら頭を小突かれた）

『おまえが休んでる間、ノート全部とつといたぜ。後でアイスおくれよ』

（隣の席の秀くん。いつもと変わらない笑顔で、ノートを差し出してくる。うわあ、ノート五冊つて、すごいねえ。受け取つてはらばらめくつたら、パラパラ漫画が書いてあつた。芸細かいなあ）

『無事だったか！』

（美和と同じように、涙を一杯ためて、仁王立ちする先生。ああ、あの強面の先生が、こんなに私の帰還を喜んでくれるなんて。思わず私も涙がこみ上げてきた）

『まあまあ、桜ちゃん！どこに行つてたの、心配したのよ！』

（近所のおばさん。おばさんの声を聞いて、足腰の弱いおばさんまで家から飛んで出てきた。ああ、お久しぶりです。大丈夫、どこも怪我してないです。ありがとう）

『・・・・・・・・』

（この家は変わらない。むしろ、このほうが家に帰つてきた実感が湧いてしまうのは、悲しいけれども事実。久しぶりだ、この空気。ああ、寒い）

『わん！わん！わん！』

（愛犬のハーディーが勢いよく駆け寄つてきた。ああ、そんなにしたら、引つ張られて首がしまっちゃうでしょ。なでてあげると、落



ち着きなくお腹を見せたり、起き上がったりと繰り返して。ああ、ハーディーも私が帰ってきて嬉しく思ってくれるのね）

ああ、やっぱり、日本に帰りたいな。そつと、そう思った。

## 16 乙女だって愛だの恋だのばかりじゃないんです。

「ミニエル、紅茶のおかわりをお願い」

「あつ、は、はい！」

「あ、僕も僕も、紅茶と、あとそのスコーンも一個とって」

「あ、あ、あの、は、」

「無視していいから、さ、紅茶をお願い」

「え、あああ、あの・・・」

「もう、姫っいたらいじわるなんだから。ああ、もしかして焼き餅？心配しなくても大丈夫だよ、確かにミニエルも可愛いけれど、今の僕の目にはもう君しか」

「ミニエル紅茶はやっぱりいいからその熱湯をちょうだい」

「え、え、あつ、あの」

「ははは、照れ屋さんなんだから。そんなところも可愛いよ」

「ミニエル、早く熱湯とあとナイフとナイフとナイフとフォークと皿」

ミニエルがおろおろしながら私とナイフとお湯と赤髪をぐるぐる交互に見ている。

ごめんねミニエル、あなたを困らせたいわけじゃないの。

ただ早くこの馬鹿王子を滅したいだけ。

「声に出てるよ、桜姫」

「あらごめんなさい、私ったら正直だから」

ははは。ほほほ。と二人で笑い合う。

その様子を、ミニエルがやっぱりおろおろしながら見ている。

「あのね、私は出て行けと言ったはずよ」

「それは昨日の話でしょ？昨日はちゃんと言われたとおり出ていったよ」

「私は昨日からずっとのもりで言ったんだけど」

「残念、声に出さなきゃ伝わらないこともあるんだよ、桜姫。という事でそれは却下ね」

ああ言えばこう言う。やっぱりこの人、ジェニールと兄弟だ。

今朝は昨日よりいくらか早く起きて、身支度も調べて、ランチじやなくてしっかり朝食をとった。その後、特にすることもないし動けもしないのでベッドに座ったままずっとミニエルとおしゃべりして。そうして、お昼の時間になってミニエルが準備を始め、私もリハビリをかねてベッドに手について伝い歩きをしていたとき。

『おはよう桜姫！今日もご機嫌麗しゅう！』

『・・・・・・・・』

扉をドバンと勢いよく開き、それはもううつるさい人が私の穏やかな日常に割り込んできたのです。

驚きと緊張のあまり拳動不審になったミニエルをどうにかなだめ、私も手伝って準備を終わらせ、ようやく席について食事を始めたところなの。

え、赤髪王子？もちろん無視よ。徹底的に無視。

でも赤髪王子も負けてはいない。

どこからか椅子を持ってきて私の隣に陣取り、昼食を取り始めた。私のスコーンや紅茶やハムを勝手にね。

しかも、全く相手しなくてもずっとしゃべり続けていたのはこちらとしては無視していればよかったけど、今度は勝手に私の髪に触ったりミニエルのエプロンのひもをほいたりちよっかいかけてきて（酔っぱらったおじさんじゃないんだから！）、相手せざるを得な

くなつて・・・。  
今に至るのです。もう！

「出て行つてよ」

「どうして？」

「どうしてつて・・・だつてこれ、私のお昼ご飯だもの」

「女の子が一人で食べられる量じゃないと思うけど」

「たっ・・・食べられるわよ！」

「まあ、いいけどね。じゃあ僕も自分の分持つてきたら昼食に混ぜてもらえる？」

「そついう問題じゃないわ」

「じゃあ何が問題なの？」

「何が問題つて・・・」

「うん」

「な、何が問題つて・・・」

あれ。何が問題なんだろう。  
いや、いやいや。

「私の部屋！借りているけどここは私の部屋！勝手に入つてこないで！お昼も一緒に食べること、いいわよつて言つてない！」

「でもここは王城だよ。いわゆる僕の家。だから、この部屋も僕が入つても何もおかしくないでしょ？」

「でっ・・・でも、客室には普通勝手に入らないわ」

「じゃあ僕が普通じゃないんだろつね」

「・・・あのねえ！」

だからああ言えばこう言つんだから！

「だいたい、だいたいねえ、何でここに来るの？自分の部屋でも素

敵なお姫様の部屋にでも行つて食べればいいじゃない！」

「やだなあ、だから素敵なお姫様の部屋に来てるんじゃない」

「私じゃなくて！」

「だって君のこと気になるんだもの。それが理由じゃだめ？」

「………」

くりつとした茶色い瞳を細めて笑う赤髪王子。

だからね、そういうこと面と向かつて言われたことなんてほとんではないから、そんな風に言われると困るんだってば。思わずうつむいて視線をそらす。

女好きとライバル心の強いことからのただのナンパだと分かっているても、対処できない私。だって慣れてないんだもの！笑って流せるほど経験もないし、大人の女でもないし。

何か言わなきゃと思うけど、何を言えばいいのか分からない。

こういうとき、女の子ってどう対応するんだろう。

ちらと赤髪王子を見ると、テーブルに肘をついてにこにこ笑っていた。

くそう、余裕だ。

王子なんだから、きっといろんな女の子と仲良くなってきたんだろう。

私みたいにウブな女の子だって、きっとたくさんいたはず。お手の物だったりするんじゃないの。見るからにこの王子、女好きっぽいし。

まあ、でも王子なんてそんなものかしらね。

……ああ、でも。

ジェニールは女に興味がないって自分で言ってたっけ。化粧も振る舞い方も嫌い。たぬきに見えるところで、まさに女の私に向かつて言つて、それで私を怒らせたんだった。

まだあれから数日しか経ってないのに、ずいぶん前のことのような気がする。

昨日、ノワールっていう人に連れられて出て行ったジェニール。  
結局おでこは触れなかったけれど。

体、熱かったなあ。

歩くのも大変っていうくらい高熱だとか言われていたし。

「ね、ジェニールは？」

「・・・桜姫、僕の話聞いてた？」

「いいえ、全然。ねえ、ジェニールは？部屋？熱は下がったの？」

「・・・それを聞いてどうするの？」

「え？ええと・・・」

聞いてどうするって、そりゃあ。

「部屋で伏せているのなら、お見舞いに行けないかしら」

だって、熱が出ているのは私をかばったからだもの。気になるじゃない。

お見舞いっていつでも、私はこんな身だから、フルーツも何も、持つて行くお見舞いの品なんてないけれどね。

あ、でも庭に出れば花を手に入れることができるかしら。

そんなことを考えながら、ふと意識を赤髪王子に戻すと、面白くなさそうな顔をしていた。

何よその顔。

「何よ」

「別にー」

「ちよっと、何か言いたいことがあるならはつきりと」

「桜姫も、兄さんがいいの？」

「は？」

いきなり何言ってるの、この人。

「何の話よ」

「だから、僕より兄さんがいいの？」

「・・・はあ？いいのって何よ、そんなこと、」

「だって、僕が一生懸命君に振り向いてもらおうと頑張っているのに。話を静かに聞いてくれているのかと思えば、口にするのは兄さんのこと」

「それは・・・」

「兄さんと一緒になるのは、僕はオススメできないよ。兄さんのところに嫁いだ場合、正妻だろうが側室だろうが、必ず刺客はやってくる。それでも、命をかけてまで、兄さんと一緒にいたいのか？」  
「・・・」

別に一緒にいたいとは思っていないわよ、と言いつ返そうとしたけれど、思いがけず赤髪が真剣な顔をしていたので、口をつぐんだ。

「僕は、父上のように、側室だって一人一人しっかり愛せる自信がある。でも兄さんは、僕のように器用じゃない。君は、幸せにはなれないよ」

そんなこと。

まだ、ジェニールの提案を受ける、と決めたわけじゃない。それでも、そう決めかけていたところで向けられたその言葉は、ちくりと心に痛みをもたらした。

私は、ジェニールと夫婦円満のような幸せ生活を送りたいわけじゃない。

私は、日本に帰りたくて、だからジェニールの提案に気持ちが傾いているだけ。

だから、別にジェニールが私のことをどう思っていようと、日本に

帰るまでにどんな生活を送ろうと関係ない。最終的に日本に帰ることができればそれでいい。

そう思っていた。うつん、今でもそう思ってる。・・・でも。

「ねえ、僕なら、君を幸せにできるよ」

ああ、なんて甘い言葉。これが、兄に対するライバル心から生まれたものであったとしても、今の不安定な私には魅力的な言葉に聞こえる。

・・・でも、私はその言葉に飛びつくことなんかできない。

「ねえ、あなたの言う幸せって、何？」

「え？」

「あなたの言う幸せは、きっと今の私にとっての幸せと同意義じゃないと思うわ」

「・・・」

「私の今の幸せは、結婚して相手に愛された生活を送ることなんかじゃない。私が今欲している幸せは・・・」

日本に、帰ること。それ以上でもそれ以下でもない。

そう、自分に言い聞かせるように頭の中で言葉にして繰り返し、動揺してしまった心を落ち着かせる。

「・・・君の幸せは、何？」

「・・・教えないわ。言っただとしても、あなたには叶えられない」

「いじわるだなあ」

「いじわるで結構よ」

そう返すと、む、と口をへの字に曲げた。



「・・・僕の知ってる姫君たちは、愛されることが女の幸せだと言っていたよ。君だって、女性だろう？」

「女って一括りにされても困るわ。一人一人、価値観が違って当然でしょ？ 幸せって一言で言ったって、いろんな幸せがあると思わない？」

「・・・それはそうかもしれないけど・・・」

赤髪の眉間にしわが寄る。

だってしょうがないじゃない。本当のことなんだから。

「・・・でも、そうね、愛されて嬉しいと思わないわけでもないけれど」

そう言っていると、赤髪はうつむき加減だった顔をパツと上げた。

「じゃあ、僕が」

「有り難い申し出だけど。私、愛して欲しい人には自分からちゃんと言っわ。でもそれは、あなたじゃない」

「・・・」

「私は、私が好きになった人、私のことを理解したその上で好きになってくれた人と結婚できればいいなと思ってる。私は、あなたのことは好きじゃない。あなたも、気になってると言っではいたけど、正直、好きの境地まではいってないでしょう？」

たとえもし、この世界で成り行きで結婚という形をとらなければいけないことになったとしても、それはあくまで「契約」。

結婚するなら、それは赤髪の言うように、ちゃんと愛してくれる人と。

もちろん、それは日本での話。ここでは、その「幸せ」は求めない。求められない。

だから。

「私は、あなたとは結婚しない」

そうはつきりと告げると、赤髪は苦笑した。

「僕は諦めないよ」

「なっ」

「だってね、君と話してるの、すごく楽しいんだよ。もちろん、他の姫君と話しているときも楽しいけれど」

「・・・結局他の姫君と同じってことじゃない」

「違う違う、なんて言うのかなあ、昔から気が知れてるような気安さがあつて、気が楽、というか」

「・・・まあ、お姫さまじゃないから、美辞麗句を述べなくてもいいしね」

「どうしてそう捉えるかなあ。美辞麗句って、違うよ、君の素敵なところをそのまま言っているだけなんだけどなあ」

「・・・」

「あれ、照れてる？可愛いねえ」

「う、うるさい！」

もう！口が減らないんだから！

「ねえ、桜姫」

「・・・何よ」

「確かに、僕は王座に比較的近いところにいるから、立場的に正妻はきつと他国の王女さまになるんだろうと思う。でもね、側室であっても、愛情はいっぱい注ぐつもりだよ」

「・・・」

「君の言うように、恋愛感情としての好き、とはまだなっていないと

思う。だけど、これから君のことをたくさん知っていけば、好きになる確率は十分にあると思わない？」

「・・・・・・」

「もう一度言うよ。僕は、君を諦めないから。君の考える幸せは、僕には分らないけど。でもそれもひつくるめて、きっと、僕と一緒にいれば君が思う以上に、望む以上に幸せになれる。幸せにする約束するよ」

この赤髪は、もしかしたら本気なのかもしれない。いや、どうかしら。分からないけど。断定はできないけど。

だけど、赤髪が自分で言うとおり、他の側室になる姫君たちのこともきつと本気で好きになって、妻となった人みんなに愛情を注ぐよな気もする。

赤髪の言う「幸せ」も分かる。いつかは、私も望んでその「幸せ」を手に入れたと思う。でもね、私は今、その幸せは望んでいないんだってば。

私は、日本に帰りたいだけ。それがまず前提で、あなたと結婚という形をとったところで日本に帰れるわけでもなし、私には何のメリットもないのよ。

それに、もちろん結婚なんてしないけれど、側室なんてものになった自分を想像したくもない。いくら愛情を注いでくれたところで、側室なんかじゃ二股や三股をかけられているのと一緒に思えてしまう。側室にとの求婚なんて、二股の申し込みのように聞こえちゃうわ。だって仕方ないじゃない。私、この世界の住人でもなくて、昔の人でもなくて、頭の中は21世紀の日本の常識でできてる現代っ子女子高生だもん。

この赤髪は特に深く考えることもなく側室っていう言葉を口にしてるんだろうけど、その時点で私たちの常識も価値観も違うのよね。他のことはまだしも、その側室なんていうものに違和感を感じない

常識に、私は浸かりたくないと思う。

あなたとは結婚はできない。メリット、気持ち、他にも色々なことをひつくるめながらどんなに考えを巡らせたところで、その答えしか出てこない。

だけど、もう一度私もそのことを告げることは、どうしてかできなかった。

「馬鹿ね」

人の事情も知らないで、拒まれても諦めずに、「幸せにする」なんて。

でも、その言葉自体は、きつと女の子なら一度は夢見るプロポーズの言葉のようで。

ここが異世界じゃなくて、日本で普通に生活していたら、うっかりときめいていたかもしれないわ、・・・なんてね。

その言葉を、もちろん受け入れはしない。受け入れられない。でもまあ、気持ちは嬉しいし、その思いを受け止めることくらいはできるかなあと思う。

赤髪はというと、変わらず黙ってこちらを見つめていて。

向ける言葉を思いつかずに、ついまた、馬鹿とつぶやくと、男は恋に関わると馬鹿になるんだよ、と目を細めてくしゃりと笑った。

ああ、その笑い方は悪くない。それまでの張り付けたような笑顔よりも、ずっといい。

そう思って声に出して伝えると、少し驚いて、今度は困ったように笑う。

人間って、色々な笑い方ができるんだわ、とぼんやりと思っていると、赤髪がおもむろに立ち上がった。

「兄さんは、まだ少し熱があるよ。怪我の方はそんなにひどくないらしいけど、日頃の政務の疲れがきつと出たんだと思う」

「え……」

「ただ、体がなまるとか言って、何度もベッドを抜け出そうとしては侍女やノワールに止められてた。侍女がベッドに張り付いてたよ。まあ、兄さんの気持ちも分かるけれど」

「……」

「お見舞い、きつと喜ぶよ。行つてあげて」

話が突然切り替わったことについていけずに、赤髪をただ黙つて見つめていると、じゃあ姫君、また来るよ、と言いついて私に背を向けた。

登場に比べ、あまりにもあつさりしすぎていて拍子が抜けてしまう。いきなりどうしたのよ。

「ちょ、ちよつと!」

「ん?……ああ、兄さんと君とのことは誰にも言つてないし、言わないから大丈夫。誰かに知られて、大事な君の命が狙われたら嫌だしね」

「え、ああ……うん。いや、そうじゃなくて……」

「じゃあ、何?」

「ええと、……あ、あの……あの、ありがとう!」

「……何が?」

「あ、ええと……」

立ち上がったとき同様、ゆっくりと振り返る。

不思議そうに首をかしげてこちらを見る赤髪。

笑顔は変わらないけど、でもどこかそれまでと違うような違和感を覚える。それに少し戸惑いながら、続きを口にした。

「ジェニールのこと教えてくれて、あと・・・あの、し、幸、せ、に、する、とか、言っ、て、く、れ、て・・・」

「・・・」

「ふ、ふざけていたのかもしれないけど、でも、あの、一応これでも女の子ですからね、・・・嬉しかった、わ」

ああこんなことを言うなんて恥ずかしい。何でこんなこと言っちゃってるの、私。

で、でも実際、ジェニールのことも教えてくれたわけだし。根っからの悪いやつじゃない、ように思うし。

なんて自分自身に、言い訳にもなっていない言い訳をしながら話した。

知らずうつむいていた顔をそろっと上げると、赤髪はまた少し驚いた様子でいて（まあ、それまでの私のことを考えれば、こんなこと言うなんて吃驚するかもしれないわね。私自身も吃驚だし）、だけれどすぐに笑顔を返してきた。

「ふざけてなんかない。それに、それでも一応、なんかじゃないよ。桜姫は、すごく素敵な姫君だ。この僕が求婚するくらいなんだから」

「・・・」

「次に遊びに来たときには、ルークス、って呼んでくれると嬉しいな。それじゃあ、またね、姫君」

そう言い残して、今度こそこの部屋を後にした。

「・・・あ・・・あの、桜、さま？」

「・・・ああ、うん」

それまでしばらく見つめていたドアから視線をはがし、食べかけのスコーンを手にとって、口に詰め込んで、紅茶で流し入れて。

「ミニエル」

「は、はい！」

思わず気をつけの姿勢をとるミニエルにちよつと笑ってから、クロ  
ーゼットを指差した。

「お庭とお見舞いに行きたいの。服を、とってくれる？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8541t/>

---

薔薇と桜と王子さま

2011年10月10日12時06分発行